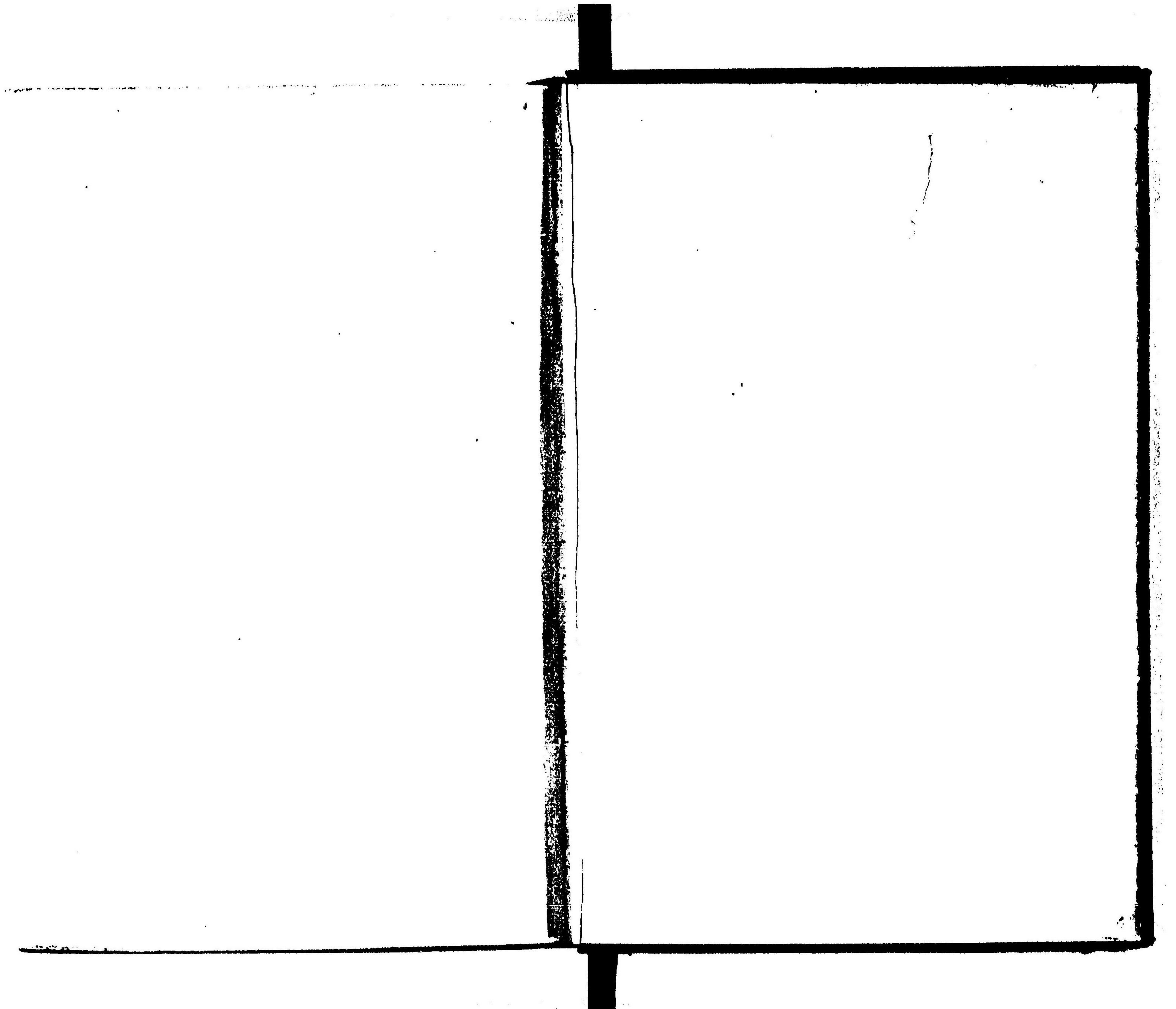


30  
318

最新の韓半島



朝鮮新報記者鹽崎誓月著

最新の韓半島

附 滿州雜記

東京 嵩山堂發行

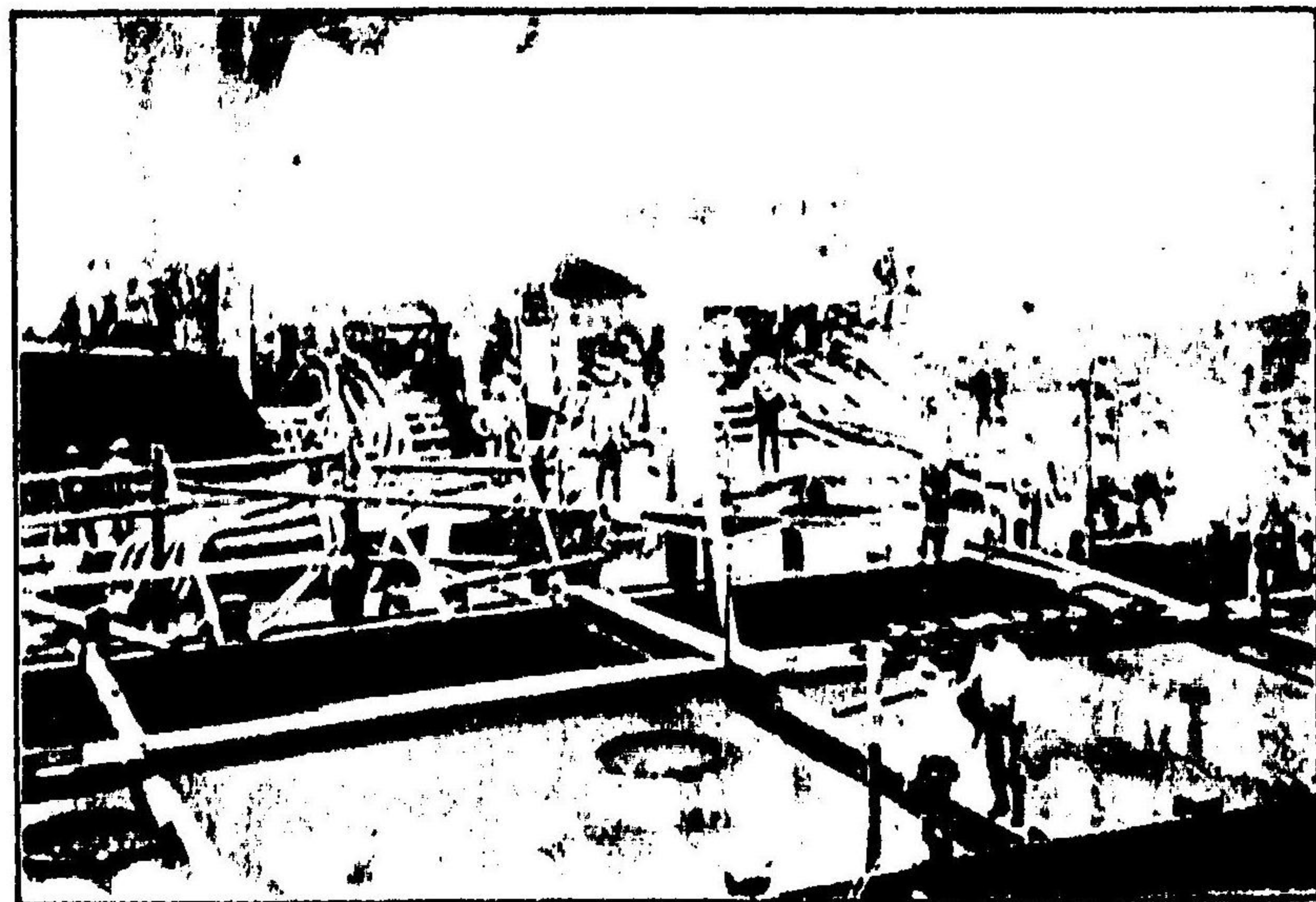
明治  
20 2 3  
内交



袴の着者



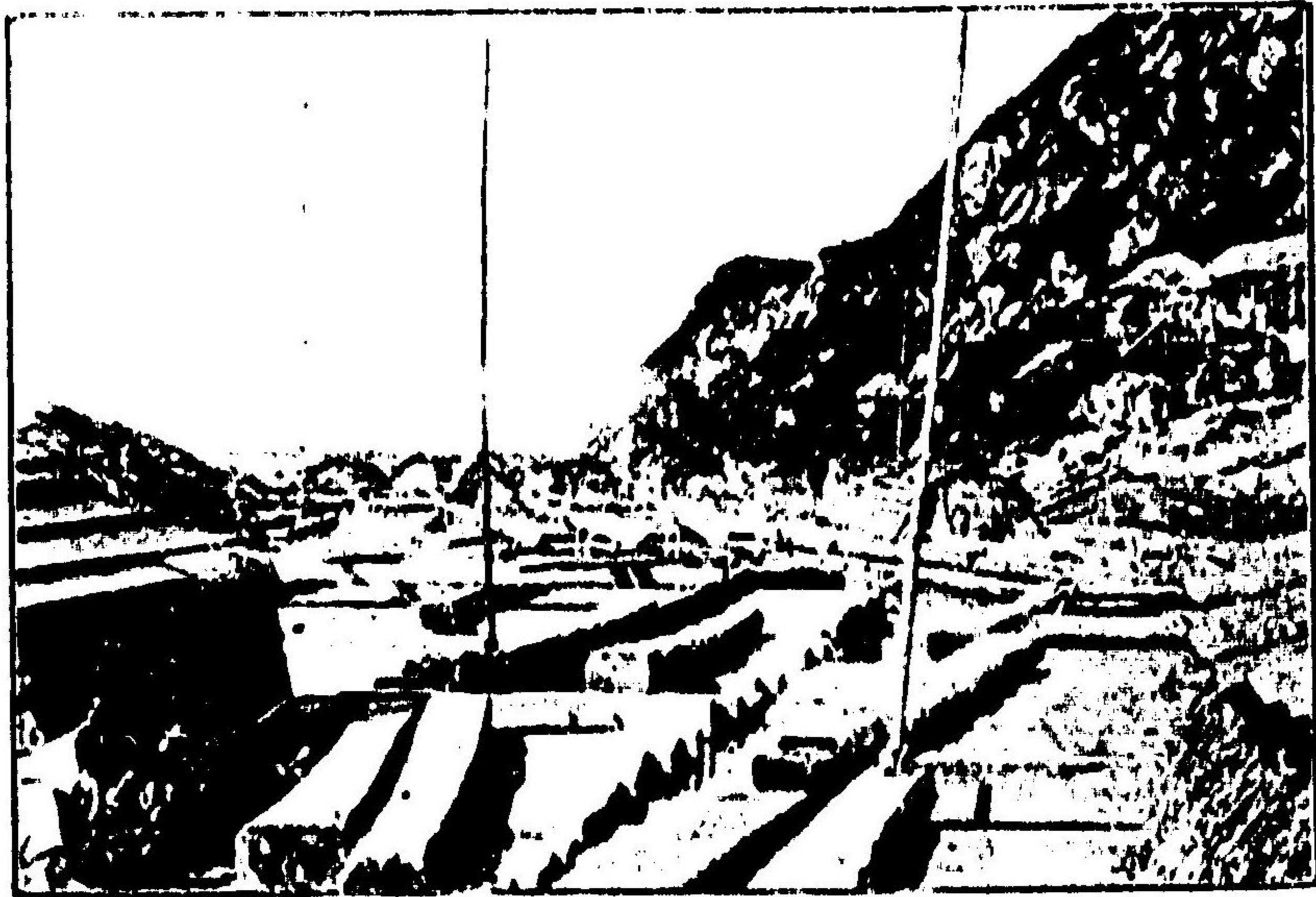
ゲーヤリッるたりが揚き浮  
(煙 谷 家)



事工揚引のゲーヤリッ



(一) 筏の江縁鴨



(二) 筏の江縁鴨



股 絞 の 人 群 探 露



濯 洗 の 人 群 探 露

序

蕞爾たる韓半島、東亞の間に介在して、久しく紛擾の禍根を爲せしが、今や日露戦争の結果として、名實兩つながら吾の收むる所となれり。東洋の天地爲に平和を樂むことを得べけんか。

此の時に際し、友人哲月子、韓國より歸り、其の多年見聞せる處を蒐めて一冊子となし、題して「最新の韓半島」と云ふ。執りて閲するに、よく朝鮮の近狀を悉せるが如し。蓋し朝鮮は國家として最も解す可らざる畸形體也。其の人民は又世界中最も遊惰なるもの、一なりといふ。之を能く研究するに非ざれば、假令政治上



(2)  
の禍根を断ちたりと雖も、今後我が國民が實業上の經營に於て、屢々不利を招くの災あるべし。誓月子の著は之を補はんが爲めにして、今日最も時宜を得たるものといふべきなり。出版に際して余に一言を求む。乃ち書して之を與ふと云爾。

明治三十八年十二月

品川小倉山にて

江見水蔭

序

鹽崎誓月子「最新の韓半島」を著はして之を余に示し且つ序文を需む余答へて曰く余は元來武人なり而も文に迂なる武人なり、韓國の事毎に紛々聞くに堪へず唯一刀兩斷之を解決せんことを望むのみ若し可ならば以て序を爲せと子曰く善哉  
蓋し子は武人に近き文人なり

月下に麥酒を傾けつゝ亂書するものは

誓月子を知れる

倭將軍

## 最新之韓半島

往●び、往●け、最新の韓半島!!!

日本が國家の存亡を賭して戦ひたる日清戦争は何が爲めぞ。

國民が極度の敵愾を以て血を絞りたる日露戦争は何が故ぞ。

大義名分の弊がる處征に韓國の擁護に非ずや、其の領土の保全に非ずや、此の擁護されたる國土、保全されたる領土には戦後何人が來り住むべきか。其の經營開拓は何人の手に待つ可き歟。嗚呼戦後の朝鮮は長へに大和民族が膨脹發展の天地たらんとす。借問す一帯帯水の彼岸に健全なる新日本の建設を見るは何れの日ぞ。

往●け、往●け、最新の韓半島!!!

四句三吟

雪月山人

江橋に船待つ頃や春霞  
アヲ、ソの頃面白き田植かな  
秋老て山々は背禿げにけり  
亡國の山は眠りて烽火盡

- 地圖に見よ世界の山河幾何ぞ吾國はくば身を密にして
- 長白の峰に積む雪見に住かむ一葉帯水物の數かは
- 長白の峰より落つるいづみ川東は五湖西は鴨綠

自序

朝鮮は今や日本の保護國として名實共に我が勢力の下に在り、戦後諸般の經營進捗し、彼の通信機關の合同を始め、貨幣制度の改革、關稅の同盟、施政の改善、外交の刷新等内外の施設改善着々其の緒に就くと共に、亞いで現はれ来るものは則ち日韓貿易の進歩發達にありとす。加ふるに滿韓鐵道は漸く完結し、沿岸の自由航路は普ねく開通されたるを以て、日韓及滿洲の距離は今後著しく短縮さるべき也。戦勝國民たるもの此の好機會に乗じて滿韓に發展の道を購せざる可けんや。

然れ共滿韓地方には自から特殊の事情ありて人情風俗より社會一般の情態に至る迄決して吾と同じからず、且つ邦人對韓人の關係も近來著しく變化せるを以て此等の事情に精通せざれば企業經營共に意外の失敗を招くことあるべし。著者茲に見る處ありて一は戦後渡航者の案内に便し一は實地企業家の参考に資せんが爲め茲に『最新の韓半島』一篇を著はし添ふるに『滿洲雜記』を以てする所以也。不文案より美を濟すに足らざれ共多年滿韓に在るの故を以て幾何か實地の事情を世に紹介することを得ば著者の本懐是に過ぎ

ざる也。爾ふ大方幸に諒焉。

明治三十八年十二月二十日

東京にて 著者 謹 識

(1)

## 最新の韓半島 目次

1	日露戦争に就て.....	一
2	釜山港と木浦.....	七
3	戦後の仁川.....	十四
4	京城と龍山.....	二十六
5	群山の大發展.....	三十四
6	江界と望巖.....	四十一
7	沿岸の漁村.....	四十八
8	北韓航路の觀察.....	五十二
9	大同江畔に移る.....	六十四
10	氷上の正月.....	七十

11 雲の牡丹臺……………八十頁

12 未來の平壤……………八十七頁

13 元山と城津……………九十頁

14 清川江と大寧江……………九十六頁

15 鎮南浦下り……………百四頁

16 安岳の溫泉……………百九頁

17 乾紅の見聞……………百十六頁

18 再び溫泉行……………百二十三頁

19 韓人の體格……………百三十頁

20 韓人と醫藥……………百三十七頁

21 韓人と汽車……………百四十三頁

22 平安道の進歩會……………百四十九頁

23 朝鮮の霖雨……………百五十五頁

24 日本人と氣候……………百六十頁

25 韓人の養蠶……………百六十五頁

26 平安道の牛……………百六十九頁

27 朝鮮の犬……………百七十一頁

28 驢馬の聲……………百七十三頁

29 鷄と雁鴨……………百七十五頁

30 虎と山猫……………百七十九頁

31 朝鮮の蠅(其他)……………百八十三頁

32 韓人の怒る時……………百八十五頁

33 韓人待遇に就て……………百八十九頁

34 軍艦揚武物語……………百九十五頁

(4)

附錄 滿洲雜記

35 火賊遺蹟談……………二百五頁

36 胡胡の記……………二百二十頁

▲蓋平旅行記……………二百三十五頁

▲滿洲の烽火臺……………二百六十六頁

▲鴨綠江の筏……………二百七十三頁

▲戦後の安東縣……………二百七十九頁

▲戦前の鳳凰城……………二百八十六頁

▲軍政の大連灣……………二百八十八頁

▲遼河の鴨綠……………二百九十三頁

▲嶺の瓶詰……………二百九十六頁

(5)

目次終

▲豚と白菜……………二百九十八頁

▲支那人の殺……………三百頁

▲對清貿易に就て……………三百三頁

# 最新の韓半島

塩崎 誓月 著

告白

朝鮮に関する記事多くは乾燥無味にして讀者の倦厭を惹き易し。故に本書は殊更に議論を避  
 け、専ら著者が實地に據る實話を主とし、人情風俗より戦後經營の資料に至る迄可成り面白  
 く編纂せしめ而して其の間に多少得る所あらしめんを期せるなり。されば若し讀者にして不  
 幸中途に於て手を離し給はば、本書は著述の第一目的に於て失敗せるものなれば讀者は慎んで  
 其の罪を謝せんのみ

(著者謹白)

## (1) 日露戦争に就て

▲明治三十七年二月九日、韓國仁川港外に砲聲起り、遼東旅順の沖に  
 旭旗翻りて全世界の空氣は茲に震動されたのである。平和と云ふ安



き幕より戦争と云ふ激しき幕に移り、それが復た平和に局を結ぶな  
 ど世界は實に面白い活劇を演じて居るではないか。其の舞臺が毎度  
 朝鮮から始まつて滿洲に移るのも亦一奇と云ふべしだ。筆と云ふ厄  
 介物を手にして、此の戦後の光景を寫さんが爲め、花の日本を去つ  
 たのは辰年の五月十九日であつた。

▲元來朝鮮と云ふ國は一種不思議な國で、昔から眞正に獨立したこ  
 とは殆んど無いが、又全く征服されたこともない。兎も角も指の間  
 の膏藥主義で數千年來半獨立國を爲して居るのだ。今日東亞の形勢  
 を一家に習ふるならば支那は半死の老父で、日本は當代の主人公、  
 而して朝鮮は厄介な放蕩息子である。此の息子は頗る道樂で、浮氣  
 で、不定立で、恰かも猫の眼玉のやうに朝夕變化する特性を有つて  
 居るから、親たるものは一刻も監視を怠ることは出來ない、一寸で

も油斷すれば直ぐ惡戯をしやうと待ち構わて居る。昔は神功皇后の  
 征伐から豐太閤の征韓を経て、維新以來も二度三度飛んだ援助を仕  
 出かしたのだから。今後は最早開港はぬやう充分に取締らねばなら  
 ない。そして息子も放蕩乍ら次第に成長して来たから此處等では何か  
 一箇の職業を與へ相當の資本を仰してやらねば親の役目が済まぬ。  
 其れを爲すには何よりも先づ朝鮮の事情を研究して息子の性質をよ  
 く見抜くことが一番肝要だ。

▲著者は朝鮮に少なからぬ關係を持つて居る。著者は夫の三十三年  
 の北清事變に始めて支那に渡り、翌年滿洲旅行を試み、轉じて韓國  
 へ移つてから三年の間朝鮮米を食つて居たのだ、超々て三十六年秋  
 一旦歸國して病める母を見て居たが、翌春仁川沖の砲戰以來心は滿  
 韓に走つて居るので遂に母の許諾を得て再び韓國へ向つたのである。

▲開戦以來郵船會社の汽船も、商船會社の船も多くは御用船に借り上げられて、跡に残れる韓國航路の汽船などは随分暗いものを使つて居た。即ち僕が門司より乗つた船は漢城號と云つて開戦前は韓人の手に成る協同郵船會社の老朽船であつたのを、俄かに商船會社が借り受けて朝鮮航路に充てゝ居たのだ、勿論多少の修繕は加わつて居るが元來廢物に近い船だから室は穢なく且つ臭く、お負けに速力は遅々として左らでだに心細き海上を一層深き物思ひに沈ませられた。▲玄海灘も無事に過ぎて、二十日午前當に對馬海峡を過ぎんとする比、何人か甲板の上において「アッ軍艦が……」と叫んだ、室を出で、眺むれば、慄は奈何に、正しく帝國の夫れと見ゆる一艦、全速力にて追ひ來り、砲口は當方向けて波に白煙、轟然一發響き渡つた。見れば橋上高く信號旗が掲げてある。船長は驚いて停船したが軍艦

よりは一隻のボートに士官一名水兵十數名を乗せて早や本船に滑ぎ付けた。右舷より乗船するが否や士官は劍を按じて大喝一聲「ゴッ、白晝偵察の見ねぬ限玉は何處へ附いてるのぢや、信號を見たら直ぐ停船して臨検を受くるのが當然ぢやないか。今回丈けは許して置くが再び斯かる不都合をしたら嚴重に處分するぞ!!!」と叱り付け、乗客に外國人は無きやと船客名簿など取調べられたが此の時軍艦よりは巨砲正に本船を的にして素破と首は、唯一撃の威勢、船客一同蒼くなる計りである。船がて調査も済んで再びボートに乗り移り、本艦指して歸り行く姿を見れば、嗚呼勇ましや、世界に誇る花の武士!!! 吾人は其の峻嚴なる海上の勤務に向つて感謝せねばならぬ。

▲問題は船中に湧き返つた、一體船長は何をして居たのだ、假令運轉士の勤務時間にせよ軍艦の信號が見ねぬとは何事だ、などと船客

は皆自分等が海軍將校であるかの如く叫び罵つたが事情を聞けば當時恰かも韓人の見習運轉手が船を操縦して居た處で軍艦より永い間倍號で問ひ合すのに氣付かず、韓人先生平氣で航海を續け遂に斯かる失態を演ずるに至つたのであるそうだ。船長と一等運轉士とが自室に居て事の起りを知らざりしは時に取つての不運であつたらう。

▲軍艦の姿も水天髣髴の際に没し漢城號は愈々韓地に接近して、遂かに低き山々を窺みつゝ正午釜山へ入港した。白衣の韓人がサンパンを操縦して近づき來るもの蟻の甘きに就くが如くである。一先づ釜山へ上陸して其の近況を尋ねずばなるまい。

行く春や妓生し花に耽りけり 西 月  
登らんと欲する春の山遠し 陽 日

### (2) 釜山港と木浦

▲下の關を距ること百二十海里、對馬とは僅かに二十餘海里的對岸にある釜山港は昔より我國と古い歴史的關係を持つて居るから誰知らぬものも無い筈だ、されど歴史は又新らしい花を咲かせて今や釜山が京釜鐵道の起點として、半島南部の縦貫二百七十哩の發端となり且つは此の鐵道は北緯二百九十哩の京義線と相通じ行くは義州より滿洲線に連結し亞細亞鐵道の一貫を見るのみならず直ちに西比利亞大鐵道と接続して全世界大交通界の起點を此の釜山の尖端に見ることを茲に特筆大書せねばなるまい、扱てく愉快なことだ。

▲市街は十二區に分たれ北濱町、本町、辨天町など、皆日本風と呼

んで居る、韓人街をすら擴張編入して慶町、寶永町など云ふのだから最早彼是論する迄も無く大日本の釜山港と公稱してよい譯だ。居留人は二萬を超わ内歐米人と云つては僅かに二十五六名稍々優勢の支那人でも八十餘名其の他は皆大和民族だ。商業貿易も同様何から何迄日本人の手に依らぬものはない。輸出輸入品の重なるものを列記すれば米、麥、大豆、海産物、天草、銀杏草、牛皮、牛骨、雞卵、金塊、棉花、蠶の繭等は主なる輸出品にして綿織物、絹織物、石油、油類、銀塊、銅、セメント、鐵器類、石炭、石灰、ユークス、粉、酒、煙草、醬油、食鹽、菜種類、陶磁器、細、吹、疊、餅寸、日用諸雜貨は主なる輸入品である。戦後殊に韓人社會に我が雜貨の賣行好きは最も著しき現象で喜ぶべきことだ。

▲烽煙山は高く居留地の背後に聳れ其の支脈東南に突起するものは

龍頭山だ。龍頭山は釜山の公園にして老松常緑の色深く韓の禿山に馴れたる殺風景の眼には殊に嬉しく映する。海に臨みて風景絶佳といふべしだ、小祠あり加藤鬼將軍を祭ると云つて居る。其他名所舊跡としては東館、西館、多大捕城、浮船樓、牧の島等史談に富むものも頗る多いが茲には贅説せぬことにしやう。

▲領事館、警察署を始め、郵便局、商業會議所、商品陳列所、尋常小學校、幼稚園、圖書館、寺院、病院等官衙及公共の機關は海外各居留地に於て最もよく發達して居る、商店、旅館、料理屋も戦後一層繁昌して居るのは事實である。

▲草梁と釜山鎮 釜山のことを敘する序手に草梁と釜山鎮の附事を加ねるとせう。即ち草梁は釜山港を距ること一哩十二鎮、釜山鎮は釜山灣の北二哩七十三鎮にありて共に釜山に接近せるが故に釜山、

草梁、釜山鎮の三ヶ處は相連絡せる一都會と見てもよいのだ、先づ草梁の記事より始めんに此地は京釜鐵道開通以前は寂寥たる一漁村に過ぎなんだが、一度該鐵道の起點となり壹萬餘坪の敷地を以て宏大なる停車場を設けられてより陸工場舎宅随つて起り税關派出所商船、郵船の出張所皆設備され日本人も次第に移住して來たのである、居住日本人八百韓人千五百を有して居る。對馬の名士津江成太氏の招魂碑は古館の上にあり明治十二年に建てられたものだ。昔時の大東館の跡に今の監理署は置かれてある。其れから釜山鎮はつまり昔の釜山で昔時の通商貿易は此處で行はれたものだ。現今の韓人は約二千人で漁民農家相半ばして居る。此地は名所舊跡の多い處で小西城跡、忠壯壇、永嘉堂、東萊温泉、古館、釜山石城皆有名なものだ。邦人の一遊に値するであらう。

▲釜山より再び乗船して海路仁川に向ひしは二十一日午後四時、然るに漢城號は韓海の濃霧に遮られて鎮海灣の沖に停船し一夜を海上に漂泊した、終夜鐘を叩いて他船と萬一の衝突を警戒し、天に星光を認め乍ら運轉の出來ぬ船長の用心には聊か驚かざるを得ない。聞けば船長、運轉士共朝鮮航路の新參であつたそうだ。

▲一夜を海上の夢に結びて明くれば五月二十二日、漂茫たる海上彼方此方に麗はしき島影を認めた。此の邊朝鮮の多島海とも附ふべく大小の島嶼綺羅星の如く點綴して居る。風無く波安く、疊上にあるが如くであるけれ共、濃霧が又怪しいとやらで例の用心深き船は木浦の沖へ停泊して了つた。

▲有望なる木浦 翌二十三日朝木浦へ入港した、木浦は全羅道梁山江の河口にありて背後に湖南の平原を控へ海陸の物産豊富なる寶

易港にして明治三十年の開港だ。釜山より百九十二海里で灣深く波  
濤かにして先づ韓海最良の港灣だ。梁山江は韓國六大江の一にして  
舟楫の便深く其の沿岸に梁山浦、羅州、光州の市場を控へ次第に内  
地との交通商業を進歩させつゝあるのだ。木浦の多産なるは實に此  
の梁山江あるが爲めにして其の流域は有名なる米産地であり且つ近  
時假かに棉花の栽培を増して將來最も望みを囑されて居る、羨望も  
同様有留だ、木浦は商業地と云ふよりも農業地として多望なるを茲  
に斷言する。且つ氣候の温良なることも亦韓國第一だから日本人に  
して農事經營の希望ある人は必ず住いて觀察し計畫するゝがよい。  
居留民一千八百、市街家屋皆相當の設備は出來て居る。

▲木浦の名所舊蹟としては輪遶山、右水營の二を擧ぐべしだ、輪遶  
山は市街の背後にある丘陵にして奇石怪岩を以て成り眺望も亦絶佳

である。右水營は木浦より七里の海南郡にあるが往時朝鮮水軍節度  
使を置きたる處で赤白各種の蠟石を産出するが故に頗る名高い處だ。  
因みに木浦港には棧橋の設備あるを以て三千噸以下の汽船は接近す  
べく旅客の昇降頗る便利である。

▲木浦より仁川へ 二十三日午前十一時漢城號は木浦を出帆して  
仁川へ向つたが途中非常の風波に悩まされて船客は大概弱つたやう  
である。豊島沖より八尾島、日清日露の海戦場を後に見て二十五日  
午前九時仁川港月尾島外へ碇泊した、項を改めて戦後の仁川を寫し  
て見やう。

亡國の庭に咲きけり草の花 百 月  
庭ある園に咲いたる百花かな 鷗 風

### (3) 戦後の仁川

▲三十八年の二月九日、仁川月尾島外に於ける日露兩國軍艦の戦端は世界の耳目を聳動せしめたと共に、此仁川港に一新紀元を劃したものである。戦争の爲めに其の土地が種々影響を受くるは當然の話ではあるが、恐らくは仁川程戦争に據つて開けたる處は少ないであらう。爾後一年間に殆んど十年の進歩をしたのである。二月九日、二月九日、爾來幾百千年に涉つて肥慙され思ひ出さるゝは此の二月九日である。仁川人士が之を呼んで仁川日と稱し公の記念日とするのも誠に當然の話である。

▲仁川の沿革、仁川は明治十六年に始めて開港せられた土地である。今日白聖高樓の大市街を見るもの二十年前の仁川を追想すれば

誰か人事の變遷夢の如きに驚かざるものがあらうぞ。二十年の日月決して長しと云ふ可らず又短しと云ふ可らず、其の當時者かりし男女の今日老いて生き存へたるものも少くない、其の語る所に據れば明治十六年始めて開港せられたる當初は茫々たる葦葦のみ生ひ茂つて其處や此處に三五の漁家がある外には人の往來も船の出入も殆んど無かつたが僅かに釜山の長崎人や對州人などがボツ／＼先登し來りて形計りの居留地を造るやうになつた。斯くて商業も比較的振ひ戸口も次第に増加する内に翌。

▲十七年の亂、に遭遇した、ユは有名なる彼の金玉均の變亂事件にして十二月四日に事を起し一時は事大黨を退けて旗を立てたけれども共遂に失敗して日本公使館迄捲添へを喰ひ八日には竹添公使が仁川に下り十一日には軍艦日進に搭乗して出發して了つた、未だ開港し

た計りの仁川であるから其の時の獲き方と云つたら随分甚だしく今にも戦争が起らうなどと狼狽して多くは避難の用意のみに狂ひ商業など全く中止されたそうだと。それから日清戦争迄は全く支那商人得意の時代で日本商人は次第に敵は強わつても毎に清商に壓倒されて居たが二十七八年の日清戦争で全く其の位地を轉倒し爾後日本商人の勢力は非常に伸張して來たけれ共眞の發展を見たのは。

▲日露戦争以後 にあるのだ。先づ第一に戸口に就て見れば明治三十六年即ち戦争の前年に於て仁川の日本人は戸數八百、人口四千二三百のものであつたがそれが戦後一躍して戸數千九百六十、人口一萬二千二百と云ふ驚くべき優數を示したのである、奈何に速に開け行く土地でも斯く急激に發展するものは少なく戦争のお蔭で十年間の膨脹を一年の間に仕上げて了つたのである。

▲埋立 又埋立 斯く急激に膨脹したものであるから一千九百餘の家屋尙ほ狭隘を告げ家賃は非常に騰貴して何人も家屋建築を渴望すれ共元來仁川は海岸に沿ひたる山下の狭き土地なれば今や擴張の場處が無い、此に於てか居留民會決議の上先づ專管居留地海岸四千餘坪のものを埋立て更に妙覺寺下及公園西方の隣接地(舊海軍墓地)を花開洞北方の高地に移し其の跡を開墾して約五千坪の市街宅地を造つた。乍併未だ以て需要を充たすこと能はず進んで各國警察署上の坂路切下を計畫し半島の表裏を通じて一貫せる大道路を造らんと企て居る。尙ほ八坂公園前の海面埋立は例の長森藤吉邸氏に據りて企てられ別に大韓建築會社なるものも海面大埋立の計畫をなして居る。而して居留地の有志者も一のシンガゲートを造りて此の埋立事業を謀らんと試みて居るが同一海面に於ける同一事業なれば多分



長森氏或は填築會社の間に舊商が出来て兎も角も此の大埋立が近年の内に經營さるゝであらう。尙ほ茲に仁川發達の爲めに特筆すべきは仁川の背後に萬石洞とて約七八萬坪の干瀆がある其れに連接せる谷、畑等を平均して埋築すれば約十二三萬坪の宅地を得べく目下居留民會議員稻田勝彦氏の手に於て埋築中である之には田中長造、大河原貞嗣、太田某其他二三の關係者もあるが要するに仁川市街は此等各方面の埋立に據りて東西南北に延長し戦後十年ならずして驚くべき大發展をなすであらう。

▲月尾島へ架橋 月尾島と云へば歴史に名あるのみならず其の名が奈何にもいみじく開けて本邦人に能く肥臆さるゝ島であるが、開戦以來此の島も軍事の必要上我軍に收用せられて其れと相隣れる小月尾島との間を埋立てゝ相連結せしめ小月尾島には美事なる棧橋を

新造し軍用品などの揚陸は全く此處で取扱ひ遠く内港へ入るの煩を省くことゝなつた、それから此の揚陸場より直ぐローンを布きて月尾島に通じ月尾島より仁川停車場横手迄天の浮橋然たる大橋梁を架設して軌道は其上を通じ遂に京仁線の停車場へ合接する仕組なのである。其の橋梁と云へば長さ數百間に涉り巾は車道の外に約三間の人道を剩し人力車の往來を許す程の計畫であるそうな、近き未來に此の橋梁が出来たならば仁川より月尾島へ一寸いと散歩になどゝ月の名残を追ふことも出来るだらう。

▲日本人の勢力 仁川に於ける各國人の人口を列舉せんか清國人は一千三十六人で歐米人が三十一人、朝鮮人が一萬六千五百五十四人である。然るに日本人の戸口は前記の如く實に一萬二千八百八十五の多數に達して居るのだから仁川在住の他の各國人（韓人を含む）を總

合したものと日本人とが略々同数に居るのだ、而も一萬六百の韓人は皆悉く山背に穢多村の如き一部落をなして彼等の別天地を造つて居るのだから所謂仁川市街なるものは全く日本人を以て充たされ日本の一開港場と見るの外何人も亦朝鮮の土地など思ふものは無い。現居留地の状態は日本專管居留地を中心として四は支那居留地に接し東は各國居留地より韓人部落に迄日本人の商賈連擔櫛比し商業繁盛を極めて居るが就中我が專管居留地には領事館、郵便局を始め各官衙銀行會社等設立されて實に仁川市街の中樞をなして居る。

▲貿易獨占の姿 居住上に於ける日本人の勢力既に前述の如く而して更に之を貿易の上に見るに韓國各開港場の最近貿易年額を約三千萬圓と見て其の内約二千萬圓即ち韓國全體の貿易額の三分の二は此の仁川港で營まれて居るのである。而して其の盛大なる貿易の八

九分迄は日本人の手に據つて取扱はるゝもので先づ言はゞ邦人獨占の姿である。斯の如きは海外居留地として最も成功したるもので我が殖民地の模範とすべき土地であらう。

▲重なるもの 仁川に於ける官民の重なる諸機關を數ふれば先づ官衙としては領事館(領事加藤本四郎氏)郵便局(局長田中健士氏)日本警察署(署長吉田勝三郎氏)臨時觀測所(所長和田雄治氏)の四を數わ、それから居留民の公機關としては居留民役所(民長富田耕司氏)商業會議所(會頭野口彌三氏)公立小學校(校長松本渡三郎氏)公立幼稚園(園長富山耕司氏)公立病院(院長遠山景精氏)等である、次に商業機關としては仁川米穀取引所(理事長加來榮太郎氏)穀物協會(會長奥貞次郎氏)第一銀行支店(支店長野口彌三氏)第十八銀行支店(支店長足立瀧次郎氏)第五十八銀行支店(支店長楊井澁藏氏)日本郵船

會社支店(支店長伊吹山徳司氏) 大阪商船會社支店(支店長前原巖太郎氏) 等である其他東西魚市場、魚業市場、公立避病院、消防組、公共井戸等の公機關も完備して居る、又神社佛閣には太神宮、東本願寺別院、淨土宗別院、妙覺寺、日蓮宗等皆設けられ醫師には公立病院の外藤本醫院、兼清病院、平田醫院外七八名の醫師が開業して居る。

▲朝鮮新報 仁川各國租界にて發行する朝鮮新報は明治二十三年の創刊(其の前身は二十一年の刊行)で實に海外に於ける日本字新聞の嚆矢とすべきものである、當時の創業者は著者の同郷人青山好恵氏であつたが氏没して後中村忠吉氏の手に移り氏又没して今や嗣子中村一郎君の相続に歸し主筆兼新聞部長として小川天穎君を推して居る。最初週刊より進んで隔日發刊となり去三十七年始めて日刊とな

し擴張又擴張、遂に今日の如き堂々たる一大紙面を發刊するに至り海外新天地の面目は遺憾なく發揚されて居る。今や號を重ねること實に二千有餘其の記事體裁は母國の田舎新聞などの到底及ぶ處でない。

▲朝鮮日々新聞 明治三十六年刊行されたる仁川商報の改題したるもので創業日淺きにも不拘今日にては美事なる其新聞紙となつた、社長は井上雅二氏で今井整洲君が編輯を主宰して居る。新報と共に居留地の輿論を代表し朝鮮に於ける邦字新聞紙中の尤たるものである。

▲各居留地と新聞紙 序手だから茲に附記して置くが朝鮮には各開港場を通じて十三箇の新聞紙が刊行されて居る、即ち釜山に朝鮮時報と朝鮮毎日、大邱に朝鮮と大邱實業新報、木浦に木浦新報、群

山に韓南新報、仁川に朝鮮新報と朝鮮日々新聞、京城に大東、漢城の兩新報、平壤に平壤新報、鎮南浦に鎮南浦、元山に元山時事の十三である、凡そ此等の新聞紙は皆其の居留地の輿論と品位とを代表するもので各新聞紙を比較すれば各開港場の品位情況が直ぐ判る、兎に角仁川が朝鮮第一の居留地たるは其の新聞紙が示す如くである。

▲將來の新事業 前項に數ねたる埋立工事の外に仁川には當に經營せられんとする幾多の新事業がある、其の第一には仁川築港の計畫で居留民有志間には多年の宿題として研究せられつゝある。第二は水道布設工事で斯は居留民會に於て數千圓の調査費を投じ六名の委員を置き目下其の設計調査中である。次は電氣事業で内外有志者の發金になり資本金十二萬五千圓を投じて電燈會社を起し近く仁川に電燈を供給する筈である。次は新道開鑿工事で各國居留地北方

の山坂を切下げて一は柵帆停車場に通じ二は本願寺下より敷島に通じ三は柵帆停車場の東方隣接地より公立避病院前に出で前記敷島通路に合するもの即ち此の三大道路開鑿工事である。次は運河開鑿工事で内港の東端より柵帆停車場前に達する運河を開鑿せんと計畫して居る。尚ほ此の外に公立病院の新築工事や學校の改築等居留地の公共事業は枚擧に遑無き程進みつゝあるのだ。

。 。 。 。 。 。 。

雲に行く宜枝の種や風流る 曆月  
海菜や雨後の珊瑚の珠類る 誌 四

## (4) 京城と龍山

▲東京と京城。 仁川を假りに横濱に喰ふれば京城は常に東京である、而も此の東京は日本で云はゞ畿内と見るべき京畿道の中央に在つて四方周らすに山を以てし傍らに漢江の流るゝ工合などはよく京都の天然に似寄つて居る。若し夫れ自然の形勢より見れば平壤の方が土地も平坦で地勢も雄大で寧ろより多く、東京に似て居るれば其斯國の歴史上より又地理上より論ずれば矢張り平壤は京都で京城は東京であらねばならぬ。兎に角大韓國大皇帝陛下の皇居まします處であるから斯國の首府たるには相違無い。

▲南山と北漢山。 朝鮮の歴史を緝けば斯國位屢々國都の變遷した國はない。之れ全く斯國が開闢以來紛亂に亞ぐに紛亂を以てし革命

に繼ぐに革命を以てし一離一合四分五裂。君主國王が到る處に國を爲し都を定めたるに原因するのである。故に南韓北韓處々方々に故都の名稱が附いて居るが其の中最も名高きものは兎に角平壤、開城、京城の三都である。で此の京城は一名漢城と稱し自然の城郭を形成せる南山及北漢山が高く南北に聳わて居る。其の山上に蜿蜒たる其蛇の如き壁岩を施したる處などは奈何にも東洋風で三國誌時代の金城鐵壁を見るやうだ。詩にも歌にもよく明はるゝ此の南北漢山こそ實に漢城の名を代表せるものではあるまいか。

▲泥岬と日本人。 京城には外國人の專管居留地が無い。條約に據つて諸外國人の雜居を許されて居る。乍併泥岬即ちチンユーカイと稱する地方は日本人の集合で宛然我が專管居留地の形を爲して居る。我が領事館も警察署も郵便局も民役所も其他公私一切の機關悉く此

の泥甌の内に建てられ直ぐ其の背後なる山の上には彼の有名なる倭將蓋の跡に帝國公使館が設けられてあるのだ。而して泥甌を始め羅洞、長洞、明洞の各街に居住する日本人は戸數千五百人口約八千名を算し堂々たる日本的勢力を造つて居る、居住民は年一年増加の一方で殊に日露戦争前纔かに三千に過ぎざりしものが戦後俄かに三倍の膨脹を示した。若し外に軍人や軍屬を數ふるならば京城にある日本人は優に二萬を超ゆるであらう。壯なりと云ふべしだ。

▲韓人と支那人 奈何に人口の稀薄なる朝鮮とは云へ兎に角一國の首都である以上は京城の戸口は決して尠小でない。但萬事が不統一なる朝鮮の事なれば小は一村一邑より大は一道一國に至る迄統計の據るべきものなく戸口の如きも明白に知ることは出来ない。韓人の呼稱する所に據れば漢城の人口三十萬と稱すれ其之は多少誇大ら

しい、先づ二十萬内外のものだらう。上は大官政客より下庶民に至る迄流石首都の官民丈けあつて他の朝鮮諸道の人民よりは垢抜けがして進んで居る。自負心も随つて強く自から大韓帝國民なりと信じて最も虚榮に最も尊大に構む容易に人に下らない。日本の大政治家なども時々彼等に愚弄せらるゝことがある。商業上に於ても存外忍耐心が強く懸引が巧みで日本人など動もすれば手玉に執らるゝことがある。近頃日本人商業會議所に對し大韓商業會議所を造り貨幣問題などに就ても中々強硬な運動をやつて居る、それから京城に於ける支那人は日本人のやうに多數でもなく又湖據地域も有しては居らぬが其の商業的勢力に至つては中々大したものだ。彼等は例の商業道徳心に強く一致團結をよく守り薄利で以てトシ／＼働くから商界に於ける權力は漸次彼等の手中に歸するやうだ。今日の有様を以て推

移する時は支那人の商權は益々擴張し韓人の進歩は案外に著しく韓國の首府に於ける日本商人の地位が何うも怪しくなつて來るやうだ。首府に於て勢力を失墜せば其の結果は韓國全體の商界に波及しはせぬだらうか。戰後我が商民の一大番發を要する處である。

▲歐米外交團 見出しは頗る奇であるが事實が當に其の通りだから仕方ない、漢城に於ける歐米列國公使は王城の附近眞洞と云ふ處に公使館を并立して白づから一種の外交團を形成し陰然我が倭將臺の帝國公使館と相對峙して居る。それで頗る奇なことは此の外交團が振ふ時には倭將臺が急に衰へ倭將臺が振ふ時には外交團は恰かも眠れるが如くである、現に日清戰爭後露佛の公館が屢屢に屢屢し得意を極めし際は漢城の政客皆悉く外交團に奔りて我公使館は門前並の聲のみであつた。然るに日露戰爭以來日の丸の御旗漢城を壓して

列國外交團は火の消わたるが如く今日に至る迄皆風雲を傍觀して居る。乍併今日の模様では外交團が依然として優大なる潛勢力を蓄わて居る。宮中よりも畏敬され信頼されて居る、他日此の外交團が再び活躍するやうなことあらば日本は幾十回の義戦を経ても枕を高くせられぬ譯だ、速かに撤退せしむべきは此れである。

▲新興せる龍山 京城南大門外一里、漢江の流れに沿ふて有名な龍山がある、古來百貨の輸出入口であつたが仁川開港以來其の繁榮の根據を仁川に奪はれ殊に京仁鐵道開通後一時不要の閑地たるが如き觀ありしが京釜鐵道は京仁線と合して南門外に廣大なる設備を施し其餘波自然龍山を刺動し殊に京義鐵道が布設されて龍山は全く鐵道の根據地となつた、京城名物の一に數わらるゝ電氣鐵道も龍山に發電池を有して居るのだから此處は愈々交通機關の中樞である、

他日廣大なる中央停車場も設けらるゝだらう、されば日本人の居住者も次第に増れて戦前程かに二百名に過ぎざりしものが今や一千名以上に達し尙ほ續々増加の一方である、随つて官私日本人家屋の新築さるゝもの日も亦足らざる有様で南大門外より龍山迄は殆んど町續きとなつて了つた。土地は古い市場であるけれ共確かに新興地といふべしだ。

▲水運の便利 仁川より龍山迄海上四十浬の間小蒸汽船の往來が出来来る京仁線が運賃引上後此間に又水運を開始するものが出来た、其他川船小舟の上下は絶えず上流に迄通つて居る、漢江流域の物産殊に材木、大豆などが此の河に據りて運下さるゝものは非常の數で其の多くは龍山にて取引さるゝ模様だ。若し夫れ夏時船を龍山附近に浮べんか漢江は實に天下の絶景……水上の樂園と化するであらう。

▲龍山の將來 龍山の將來に就ては尙ほ種々なる大設計があるらしい、乍併之は或る筋の秘密に屬するから今日明言することを得ない、兎に角南大門外より龍山にかけて一圓に大市街と大建築が出来るに相違ない、龍山の將來は實に有望なりといふべしだ。

大空や増廣層散て春の星  
春の星愛の眼に似たるかな 同



## (5) 群山の大發展

▲群山の位置 群山は全羅道の西端なる錦江の河口に瀕して其の南岸にある新進の開港地である。深く灣入して居るから風浪の虞は少ないが其の代り堆砂若石出沒して水深が淺いから千噸以上の大船を入るゝことは六かしい。殊に退潮の時は潮流急にして小船の投錨にすら困難を感ずる程である、随つて港としての價値は極めて乏しいが併し乍ら地は韓國第一の沃土たる所謂全州の平野を控へ錦江流域の富を吸収するに至極便利の位置に立つて居るから此處が頗る有望な譯である。

▲貿易の發達 三十二年の五月群山が開港以來今日に至る迄前後七年間の發達は眞に刮目に値ひするものがある、試みに累年の貿易

に就て見るも年々約五十萬圓の増加を示して居る、即ち三十二年開港の當年は僅かに二十五萬圓の貿易をなしたるに過ぎなんだが三十三年には五十萬圓、三十四年には百萬圓、三十五年には百五十萬圓、三十六年には一躍三百萬圓といふ著しい膨脹を示し三十七年は近年にない不作の爲め貿易沈没したけれ共尙は二百五十萬圓の貿易額に上つた、貿易品の主要なるものは輸出にありては米を第一とし大豆、麥、牛皮之に亞ぎ牛骨、五倍子、砂金、紙、乳鹽魚等が重なるものである。輸入品には金巾、石油、紡績絲、燐寸、陶器、農具、白木綿、砂糖、煙草、染粉等がある。始めは無論輸出超過であつたが近年却て輸入超過となつた、之れ三南の土地が肥沃で韓人が富み其の購買力が高いからである。

▲根底の強固 群山の人口は仁川や鎮南浦の様に急激な増加は示

さない、其れは群山の位置が中央政界と遠ざかつて政治上や軍事上に格段の關係を持たぬから従つて戦争の餘恵に依つて活動するといふやうな事情がない、されば一時的の山師連は多く仁川京城地方に奔り群山に入り込むものは必ず一定の考を持つて或は土地を經營するとか或は農業に従事するとか兎に角一定の目的を持つたもの計りだ、故に居住者の根底が頗る強固で少くも五年乃至十年經營の方針を立て他の開港場に於けるが如き浮薄の點がない。之は頗る慶すべきことだ。

▲愉快なる現象。現今群山の戸口は戸數四百人口約二千と稱せられて居る、尙嶺々入り込んで來る模様である。乍併群山地方の日本人は居留地にのみ躍進して居らない、今試みに群山居留地を出で、韓人部落に足を入れ其れより附近十里の地を其處此處と廻つて見る

と實に愉快極まる一種の現象がある。亦は韓人の農家と入り交つて處々に日本の農夫が居を構わ田には日本風の田植歌を謳ひながら耕作に従事するものを見る、彼等は韓人の間に交つて茲に新日本の建設に従事して居るのだ。政府の朝鮮經營が何の彼のと行き惱んで居る際無邪氣にして可憐なる、而も敢爲勇邁の氣象に富める日本人が自己の力に依頼して自から開拓に従事して居るのは奈何に罷はしい事業ではあるまいか、吾人は帝國發展の先驅者としての彼等に多大の感謝を捧げねばならぬ。

▲群山と農業。若し夫れ農業地としての群山の價値に至つては今更喋々する迄もない、錦江の水域には肥沃豐饒の土地幾千萬町を控へ三南の平野は草藪茫々として殆んど限り無きの天恵を濫りて居る、而して群山は此の豊富なる全羅、忠清の二道を界する錦江の河口に

位して一大吞吐口をなして居るのだから商業にも農業にも俱に絶好の地形を占めて居る。年々群山海關を経て仁川、釜山又は日本へ輸出せらるゝ米穀は約四十萬石に達して居る。此外萬頃の平野から諸方に送り出される米穀と韓人の手に據り他方に送らるゝものとは統計上の見るべきものなけれ共概に八十萬石に達するであらう。之を見ても如何に群山方面が農業地として有望なるか、分るであらう。

▲邦人と土地所有 群山方面に於ける本邦人の土地經營は近年著しく其の歩を進めて今や邦人の有するもの約六千町歩の多きに及び、之に投せられたる資本金は約七十萬圓に垂々として居る、若し韓人が現在耕す處の一段歩の土地を日本農夫の手にて普通日本風に耕作しても優に二倍の收穫は得らるゝのだから全體に於ては非常の收穫を増す譯だ。

▲群山と漁業 群山は農業地としての外に又好箇の漁業地である、否漁業根據地である。乃ち群山港前面の竹島は韓國西南岸に於ける隨一の漁場であつて毎年日本から群集する漁船の數は實に數百艘に上るのである。竹島の漁業は重に鯛、鱒等にして春から秋にかけて約半歲に涉り其の獲物は多く仁川、京城へ供給販賣せらるゝのであるが此の間に各漁船は少くも三百圓以上の純益を收めて歸るのである。而して漁期の間群山の繁榮は一層熾んになり行くが例である。

▲群山と交通 群山の繁榮が比較的速むる原因は實に交通不便の四字に歸するのである、近い仁川との交通すら商船會社は加古川丸一隻を以て一週三回の定期を開いて居るのみだが此の仁川群山線は今や商船會社の獨占なれば會社も自然力を注がぬ傾きがある。會社が此航路に力を注ぐならば今少し斬らしい良い船を廻さねばなら

ぬ。それから群山と全州方面の交通も現在の儘では行かぬ、尤も群山の有志者も此點に就て大に研究し群山全州間に鐵道布設の計畫を凝らして居るが其の成功の曉迄には尙ほ多大の日月があるであらう。

▲海壁工事の進捗 既に前説した通り群山の港が不完全なる爲め貿易上にも種々障害を招くが故に群山居留民は現在の波止場に人工を加へて貨客出入の便利を圖らうと計畫して居たが愈々多年の宿題が落着して海壁工事を起すこととなり既に着々進行中である、第一期の突堤工事は明治卅八年中に成工の見込で續いて第二期第三期の工事にも取掛る筈である。此の海壁工事は韓國に於ては未だ他の何れの港にも見るを得ざる程完備したものであるから愈々全部落成の曉には群山は頗る便利の港灣となり港頭の面目を一新するであらう。

むしり取る政しき草の匂ひかな 陽 四

(6) 江景と望巖

▲群山の上流十里 にして錦江が全羅、忠清の二道に岐るゝ處に龍安があり龍安の直ぐ上に有名なる江景の都邑は打建てられてある。古來朝鮮で五大口と數ねたる輸出入口の隨一は即ち此の江景にして歴史上にも屢々名の顯はれた古都である。又日本の倭寇が慶尙、全羅の海岸を荒して此の邊迄やつて來たことも地方の記録に存して居る、兎に角古い都丈けに種々なる關係も多く又白づから民富みて社會も進化して居るやうだ。

▲江景視察旅行 三十七年六月十七日著者は友人二名と共に仁川を出發して江景視察の途に上つた、翌十八日群山着同日直ちに錦江通ひの小蒸汽船に乗つて群山を發し數時間にして此の江景へと着い

た。玉女峰と云ふ小山の下に船を停め其れより上陸して江景の市街に入れば流石は韓人の巢窟程あつて不潔臭穢外を街く計りである。暫く其の間を通り抜けて知友井上君の宅に往つたが折しも夏の始めなれば其の家に蠅の多いこと、日本人の宅ですら驚く計りだから況して韓人の家と來たら何うであらう。

▲江景の日本人 其の數約四百に充ちて居る、皆悉く韓人相手の商業家若くは農事經營者で其の意志の堅固なることは群山に於ける氣風よりも一層酷いやうだ。兎に角我が政府の手の行届かざる地方で韓人と相對してやるのだから鐵の如き意志を持たねば立ち行かぬであらう。中には随分豪傑風の男もあつて江景に於ける日本人は一種奇妙なる風習をなして居る。但少數の日本人が時々相軋して互に排斥を事とするに至つては實に同胞として忍ぶ可らざることだ、

江景に於て若し此の弊風を取除いたならば同地の居留民は實に我が海外進取的國民の模範となるべきものであらう。

▲雑居と新市街 元來江景は開港場でもなければ開市場でもない、唯日本人が漸次入り込んで來て商店を開き居宅を構へ事實に於て開市場となつて了つたのである。されば勿論我が居留地等のある筈なく約四百の日本人は皆韓人街に雑居して居るのであるが近頃或る人々の間に新市街設計の計畫ありて純然たる日本人市街を造る考案であるそうなる。若し此の計畫が成就したならば江景の面目は必ずや一新するであらう。

▲望巖の農場 江景觀察の序手に望巖なる勤農會の農場を一見する機會を得た、望巖と云へば江景より尙ほ十里の上流で此邊迄行けば泥の如き錦江も流石に清く澄んで居る。井上君に案内されて仁川

より同道せる二友と共に蒲湖に乗じて此の寢殿に着船した時が丁度午前の十時であつた、それから上陸して勸農會屋の農夫の家を尋ねたが一向見付からない、漸く見付けても折悪敷公州の市に行つた留守であつた、依て吾々は直ぐ農場に向ひ河岸に沿ひたる蘆田の開墾に着手せるものを見たが之は左程好成績とも見えない、矢張り日本人の經營としては地價高く其熟田を買取りてそれを耕作した方が其結果を收むるに相違ない。農場よりの歸途魚を漁して韓人の飲食店に入り晚餐を喫した、夕方干潮を俟つて舟を出したが歸途頗る多くの時間を費し午前二時頃漸く江津に歸着した。

▲土地の種類 農場觀察の因縁より多少土地に關したことを述べんに韓國の土地は普通米を作る熟田の外に休耕地、荒蕪地、蘆田、鹽田、林地、沼地等の種別がある、休耕地とは一時耕作地であつた

ものを途中より休耕し居るもので韓人は之を陳沓(廢畑)陳田(廢田)と稱して居る、荒蕪地は長森氏の問題以來日本人によく知られたが多くは官有地で草のみ茫々と生へ茂り全く荒蕪に委せる開墾の地を云ふのである、之は開墾權の特許に據つて始めて開墾に着手するのだ、それから蘆田と云ふは蘆のみが繁茂せる土地で朝鮮では此種の田が頗る多く且つ秋期燃料を獲る爲めに非常に珍重されて居る、次に鹽田と云ふは普通耕作地と同じきもので價格も略々熟田同様だ、次に林地と云ふは又の名を松田と稱し日本の山林のことであるが朝鮮の林地は多く菴を含み其れが何時も紛争の種になるから餘程注意せねばならぬ、最後に沼地と云ふは浦、水田、澤等の通稱で此種の土地には河岸等に頗る有望なものが深山ある。

▲土地買入に就て 右に記載したる土地の種類に従つて皆失れぞ



## (7) 沿岸の漁村

▲島嶼の開拓 朝鮮沿岸到る處我が出稼漁業の熾んなるは實に對韓經營の一大發展とも云ふべく、其の直接及間接の利益は莫大無邊のものである、彼等の或るものは年々故國へ歸り海上徒らに往復するの不利を覺り沿岸の或地點に據りて不完全乍らも住むべき家を見て遂には妻子眷族をも伴ひて此處に三々五々漁村を造り一個の新日本を形造らんとして來たのである、此の趨勢は何十年かの後必ず特記される時代が來るであらうと信ずる、現今其の移住の盛んなる島嶼は群山の沖の竹島が第一で其の漁期には二千人の本漁夫來り且つ年中常住するものも少くないそうだが次は木浦の沖の濟洲島馬山灣頭の巨濟島釜山の先の南海島を始め蔚山沿岸から江原

道、咸鏡道沿岸に至る迄日本人の漁村を形造らぬ所はない、其の最も盛んなるは勿論西海岸殊に三南の沿岸である。尙ほ近來は西北嶺南浦沖や安東縣附近迄膨脹せんとする形勢があるやうだ。

▲單獨者と妻帶者 沿岸漁村の開拓者は是非妻帶者で無ければならぬ、單獨者では所詮成功せぬ、之れ朝鮮邊へ迄來て一稼ぎしやうと云ふ程のものは大抵身體強壯で意氣が壯んだ、其の壯んなる丈け其れ丈け身持ちを憚まぬものが多い、儲かれば儲かる程随つて使ひ儲からねば儲からぬで自祭を起して使ふ、どちらにしても立ち行かぬ話だ、遂には可惜男の腕を持ちながら失敗するか其からの方へ落ちて了ふ、嘆すべきの至りだ、之に反して妻帶者は萬事秩序的に經營し而も金儲けは比較的良いものだから必ず成功する譯だ。

## ▲漁業兼農業

漁村開拓者は妻帶者に限るとして此等の家族は唯



漁業に依りてのみ衣食するかと云へば左様でない漁業の閑な時分  
必しも閑で無くとも――妻子は近傍の畝を耕し野菜を植ゑ自家の副食  
物を得るのみならず餘剰あれば魚同様之を舟に積み開港場に至りて  
販賣するのだ、故に漁村は二様の利益を得て其の家族生活には毫も  
差支ゑざるのみならず年々所得を増加し行くべき望みがある。

▲詩的生活 之を詩的に解釋すれば實に無趣味の生活なれど之を  
理想的に觀察すれば漁村の開拓は實に詩的生活である、妻子眷族相  
扶け一家團樂して幸福なる日を送り海風の濤々として絶へざる濱に  
浴も執るべく運動もすべく以て心身の健康を保ちなば噫吁天下又何  
處に斯かる樂園あらんやだ、且つ新天地に社会的煩累無きは開拓者  
をして一層自由ならしむることであらう。

▲錦江の爆薬漁 漁業の序手に僕が實驗した錦江上流の爆薬遊

漁をお話しやう、或時二友と共に舟一艘を雇ひ同上流に於て日中爆  
薬を投入したが其の發すると共に渦巻く水の間より大きな鯉や鮒や  
鱸などが沸騰して現はれ來り船を縦横に操りて之を捕ふる愉快さ唯  
三發にして魚が舟一杯になりたれば止め歸りたるが一時は河一面白  
色に變ずる程魚の浮ぶを見た位である。

なちこちに高麗人白き互野かな 鷗 且  
盤飛んで明滅す水に星の影 全

(8) 北韓航路の視察

▲八月十四日 余は大阪商船會社の汽船紀伊川丸に便乗して北韓航路の視察に向ひ仁川を出發した、此の行實は八月十日出發の豫定で手荷物迄積込み自分も一應乗船したのだが時恰も旅順敵艦隊逸川の報あり其の内の幾隻かは朝鮮海に運れたりとて韓海航路は其の筋より俄かに停止せられたれば數日間延滞して十四日出帆となつたのである、處で此の紀伊川丸と云ふは二百九噸の小汽船で以前大阪紀州間の航路を通つて居たそうだが現時は其の姉妹船たる加古川丸と共に韓國へ廻航し、先づ仁川を基點として鎮南浦、兼二浦、何日里浦を経て龍巖浦、安東縣に至る北韓航路を開き、聽がては旅順の靜穩に復するを冀ちて其の航路を大連灣芝罘に迄延長しやうと云ふ會

社の計畫であるのだ。

▲乗客の色々 余は商船會社から特に寄附せる優待券を以て一等

室に乗つたが同室には仁川郵便局長田中健士氏が乗船して居られた隣の二等室には軍用鐵道監部の赤帽帶劍の先生方が便乗し、三等室には京義鐵道の工夫のみが二百名も乗船し室に入り切れずして多くは甲板上に立つて居た、後に非常の暴風雨に遭ひ船中大困難を惹起する原因は茲にあつたのだ。

▲型嶺鎮南浦 十四日午後三時仁川を出帆して長山串の灘處も無事に通過し翌十五日朝起き出で、眺むれば船は今大同江を遡り兩岸の風景を送迎しつゝあるのだ、午前十時無事鎮南浦に着したが直ちに抜錨して上流なる兼二浦に向ふ筈だから余と局長とは上陸せず船中にありて出帆を待つた、然るに荷物揚卸に手間取りて午後二時に

至り漸く出帆更に江を遡ること数時間にして兼二浦に着した。

▲兼二浦の地形 兼二浦とは大同江に沿ひたる無名の一小部落であつて鐵道監部の渡邊少佐が此處の開拓を計畫し自己の名を附けて兼二浦と呼んだのである。兎に角大同江の正流は此の兼二浦に至る迄數十尋の水深を有し五六千噸の大船巨船を自由に出入さすことが出来るのである、現に此の時にも御用船萬里丸三千八百噸辰丸約三千噸の二大船が軌條枕木を積んで入港して居た。其の陸揚げやら停車場の工事やら實に盛んなものである、それから此の兼二浦より黃洲へ一枚線が布設されて京義線に合するのだから兼二浦はツマリ海陸の連絡地となつて居るのだ、軍人軍屬の外に四五百の居住民ありて中々繁盛に見受けられた、此夜加藤班長を訪ひ談數刻にして別れ歸り紀伊川丸に戻つて大同江の流れに枕しつ江上に一泊した。

▲何日里浦航路

翌十六日船は未明に兼二浦を解纜し九時頃鎮南浦に着いた、余は田中氏と共に上陸して鎮南浦郵便局長東條源太郎氏を其の官舎に訪問し暫く談する内に早や船よりボートを渡して急遽乗船を促した、余等の乗船するや直ちに錨を巻いて出帆したが大同江を出で、徳島を離るゝ比より天候漸く險悪となりて風波俄かに激怒する如くである。元來此の何日里浦航路は非常の淺瀬にして潮流は最も激しく而も水深は緩かに一尋半を示すのみだ、紀伊川丸にして始めて航すべしだが少しく脚深き汽船は到底行くことが出来ぬ此日船は何日里浦へ着すべき豫定なれ共天候と潮流に妨げられ加ふるに前後左右に露出せる淺洲ありて何日里浦へ入ることが出来ぬ數十哩の沖合に碇泊して空しく一夜を漂泊することとなつた、船客の不平不満は非常なものである。

## ▲海上の暴風雨

夜來雨降りて翌十七日は一層風荒く雨烈しく非常の暴風雨となつた、晴雨計は激變して危険を示し午後に至るも風浪益々加はるのみだ、此口恰かも釜山にて大風雨が起り非常の損害を覺れた當日だから北緯方面も無論無事ではない筈だ、其處で仁川より甲板の上に荷物扱ひをされて居た百餘名の無室客が俄かに紛擾を始め船員に向つて船室供給を迫り聽かねば亂暴もし兼ね間敷勢ひである、依て船員は余と局長とに請ふて二等室を一等室に合併し其の跡へ甲板客を收容する方法を執つた、そして兎も角も甲板上風雨の難丈けは避けしめたが一時は非常の願きだつた。此夕は恰かも陰曆七月七日に當るのだ、然るに此の不穩なる天候に出會しては天の川も大洪水であらう、風は颯々、波は濤々。

## ▲鴨綠江に向ふ

翌十八日風雨尙ほ歇まず晴雨計は稀有の變動を

示して居る、船行る可らず、又退く可らず、然れ共茲に非常の問題が起つて來た、并は船に不相應の人員を積み空しく海上に停船せし爲め飲料水に欠乏を告げ最早半日も支へることが出来ぬと云ふのだ此に於て船長は一應衆議に謀つたが甲は險を冒して前進せよと云ひ乙は今暫時見合せと叫び議論沸騰して統一しない、船長遂に斷乎として甲説を執り豫め船の動搖非常なるべきを警告し尙ほ非常の際は 大和島に避難する旨を告げて錨を捲いた、船中却つて寂然となつて了つた、午後三時遙かに大和島が見れた、時に南吹み風漸く和きて波も靜かなれば則ち大和島寄港を止めて眞直に鴨綠江に向つた、余は夏服を着して船橋の上に立ち船の行く手を眺むれば夕陽既に地に落ちて鴨綠の夕景早や肌寒き計りである、波間幽かに互船の碇泊せるものは之れなん龍巖浦沖に於ける我が御用船の集合點にして數十

艘の汽船淡く煙を吐いて居る。

▲龍巖浦上陸

紀伊川丸は昨夜碇泊司令部の指定せる地點に碇泊し今十九日午前七時鐘を捲いて進行を始め鴨綠江口の龍巖浦に着いた、余は田中局長及船の事務長と共に上陸して開戦以來名高き此の地の状況を視察した、先づ眼につくは露國が經營の跡を遺せる煉瓦建家屋、倉庫、機關庫、輕便軌道等にして今は皆我が軍の用を爲し家屋の如きは或は守備隊宿舍に或は碇泊司令部官舎に充用せられて居る、東北に一の丘陵ありて其の下に岩石相重なりて海中に突出し松などが生れて頗る風流の形を爲して居る、之を名けて龍巖山と呼ぶ、恰かも我が京都の金剛寺の池中を見るやうだ、余は獨り此の岩に登れば帶劍せる兵士二名嚴重に佇立して居た、多分見張りの兵士だらう、少しく談話を交ふる間も無く汽笛頻りに鳴りて出帆を報じ

た、馳せて上陸場に戻り通船を呼びて本船に移るや直ちに抜錨して

紀伊川丸は安東縣に向つた。

▲江上義州に至る

紀伊川丸は一旦安東縣に碇泊し余は上陸して種々觀察を遂げたのだが此地の状況は別に「安東縣視察」の部に詳説するとしやう、扱て安東縣より義州へは水路三里にして陸路は對岸より三里半である、若し順潮に乗じて河船に風を孕めば僅に一時間半にして着する、其間舟は江上成多の島洲を繞り一折又一曲或は淺々たる江水の中に浮び或は深緑の柳邊を過ぎ風光頗る明媚なりと云ふべしだ、東岸には白衣の韓人が悠々緩歩するあり西岸には悠深き支那人が孜々勞役するあり實に面白きコントラストを呈して居る、艦が左に九連城の征露紀念碑を望み右に統軍亭の高閣を望み虎山の下を通ぐれば舟は既に九龍浦に在るのだ、此處より上陸し山を登

りて義州城門を過ぎ統軍亭の下に出で西に丁岐の岩山を眺め南に白馬山の森林を望み、滿韓の山色水光を眺め盡して坂を下れば之れ即ち義州の市街である。

▲義州と新義州 義州は義州郡守の居る處で古來滿韓交通の要衝に當つて居る、郡は東西十里南北十七里にして二百四十五村を包含して居る、最近の統計に據れば義州市街の戸數一千百餘人口七千八百餘と稱して居るが其の實は少くも一萬人に達するだらうと思はれる。家屋は殆んど瓦葺きにして韓人の市街としては清潔の方だ、毎月一日と六の日に市を開きて四方より人民集まり北韓有數の商業取引を行つて居る、貨物は雜穀、海草、海産物、雜貨、韓人裝飾品及綿布の類で通貨は重に我が銀貨、紙幣、軍票及白銅貨を用ゐて居る。此地の人情風俗は一般に野卑にして近時一進會員の斷髮するもの甚

だ多く既に全人口の五分の一に達して居るといふことだ、官衙は郡守、監理の二ヶ所で昨年來求是學堂と云ふ日語學校を設け生徒百名に日語を教授して居る又別に米佛の耶穌教會堂二ヶ所あるけれ共一向振はない、居留日本人は軍人軍屬以外に二百名兵站司令部監督の下に日本人會を組織して居る、會長、評議員、衛生委員ありて人頭税及營業課金を徴し營業は悉く出願認可の制を執つて居るが先づ料理屋に非ざれば旅館、飲食店等にして見る可き店舗は一二軒に過ぎない。元來義州は滿韓交通貿易の要點で又鴨綠江材木の輸出盛んなる爲めに古來有名な市場であつたが今回京義鐵道の終點が新義州に移された爲め或は其の繁榮を新義州に奪はるゝかも知れない、新義州は義州より下流四里、龍巖浦との中間にありて安東縣の對岸である、此地は京義鐵道の爲めに開かれ命名された土地で今や鐵道監部

の經營に據りて家屋も多く建築され日本商人もトシ／＼入り込んで居る旅館、料理屋の繁昌することは寧ろ安東縣をも凌ぐ計りだ。但土地が低い爲め雨期浸水の不便あれば或は京義線の終點を義州の方へ移されるかも知れぬ、若し矢張り新義州にありて此處から鐵橋が安東縣へ架り我が滿韓鐵道の接續を見るに至つたならば新義州こそ重要な停車場となるであらう。

▲歸路に就く 安東縣、義州、新義州等を觀察して八月二十二日

紀伊川丸に便乘して歸路に就いた、龍巖浦より沿岸を傳へば耳湖浦梨花浦の二港がある、殊に梨花浦の如きは鐵道經營の爲めに樞要なる揚陸場となつたのである。何日里浦へは寄港せずして二十三日鎮南浦着余は上陸して二日滞在二十五日兼二浦に至り友人古田稻甫氏に面會した、氏は前の仁川居留民長で十數年間韓國經營に奔走して

居るのだ、共に御用船に便乘して江を下つたが此夕恰かも陰曆七月十五夜の子蘭盆會に當り明月中天に懸りて大同江上の風色洗ふが如しである、故郷に於ける友人家人も思ひ遣られて遊子無限の感慨に咽ぶは當に今宵の如き時であらう、二十七日古田氏と共に三ッ輪商會の汽船蒼龍號に乗つて鎮南浦出帆翌二十八日仁川に歸着した、月尾島外にワリヤー号の引揚工事、ユレイツ號の始末など見る眼に新らしき心地せられた。

今朝秋の朝顔頭を伸べにけり  
故郷の母やせゆらん秋の風 全

## (9) 大同江畔に移る

▲北韓航路の觀察より歸來せる僕は戦後經營の必要が最も同方面に急なるものあるを認め内外に向つて盛んに之を唱道した。其の結果として差當り朝鮮新報社より人員を特派することとなり僕自身が再び其の撰に當つた。其處で僕は暇乞旁々社長中村忠吉氏の宅を訪ふたが折柄中村氏は不快で病席に在り、余が其の側に座して出獲の事など打合せ或は將來の希望を述べて何とは無く別れを惜まれたが、嗚呼願へば之ぞ氏と僕とが最終の會談と爲つたのである、即ち翌年一月、僕は大同江畔にありて中村社長の訃音に接したのである、凡そ人の死は何處に於ても哀しきものであるが殊に海外異域にありては其の悲感も亦一入である。人生夢の如しとは眞に此等の感をや贈

ふのであらう……

## ▲長山串の灘處

九月二十三日僕は第四松江浦丸と云ふに便乗し

て仁川を發し大同江畔に向つた、同船は七十餘噸の小蒸汽船でお負に三個の圓平船を率ゐて居るのだから速力も遅く、殆んど和船と撰ばない。徐々に進航して翌二十四日彼の有名なる長山串(チャンクン)に差し掛つた。長山串は黃海道の西端長く黃海に突出せる岬角にして、西南北の三面より來れる潮流は此處に集合し、衝突し、韓海第一の灘所と云はるゝ處だ。平素無風の時にすら此處だけは波荒れて靜穩なることは年中滅多に無いのであるが、此日は恰かも陰曆八月十五夜に相當して一天拭ふが如く、風穩かに波鎮まり、流石の灘所も至極靜平なりしは堪る不思議な程であつた。

## ▲黃海々上の明月

折柄東天より十五夜の明月靜かに現はれて、



太陽に代はれる其の光輝は鮮々又閃々として真に活けるが如くである。見渡せば韓の山々は蜿蜒として奥深く相連なり、其の果てには月に噛く虎も棲むであらう。又西の方遠く黃海の波間には點々島の形も見わた其の先方には勇ましき帝國艦隊の旅順攻撃も行はれて居るであらう。更に想ひを東南に馳すれば我が故國………扱ては故郷の親しき山水は奈何に此の今宵の月を仰ぐであらうか。同じ一個の明月に對し、古今東西萬人萬歳の思ひを寄するこそ人間世界の變妙なれ。月や奈何に………と空を打仰げば唯嗚々と黃海の上に光り輝いて居る。

▲平壤と京都

長山中も無難に過ぎて其の翌二十五日午前鎮南浦に着、上陸して二三日滞在、同二十八日午後大同江通ひの汽船鐵島丸に便乗して平壤へ着いた、平壤は取りも直はさず我國の京都である。

○。金剛寺や銀閣寺は無いけれ共其れよりかモツと古い建築物が遺つて居る。加茂川の清き流れに比しては餘りに便利過ぎる大同江もある。京都美人の有名なるは今に始めぬことなれ共、平壤も亦朝鮮第一の美人産出地で彼の妓生なるものは殆んど平壤の特産と謂つてもよい、我國の紳士諸君で若し朝鮮婦人を妻にせんとする物數奇の人あらば非は必ず平壤で求めらるゝがよい。

▲長江樓の船料理

平壤第一銀行出張所に弓場重榮君がある。君は有名なる韓國通で日韓會話の書物など多くは君の著述になつて居る。前年仁川で別れてより久し振りの會合なれば兎も角も僕の健康を祝さんとて一夕長江樓と云ふ料理屋へ案内された、客は僕の外に園田大井の二君、主客共に都合四名である、席は朝鮮の温室を其位造り直はしたもので、天井の低いのと室の狭いのは其の特色である。

且つ飲み且つ食ひ小梅小嶋など云ふ平壤妓生の粹な昔色など始まつたが其の平壤調と云ふのを聞くに

「平壤で、眺めの巻いのは牡丹菫。見下す白帆や船橋里。中に鐘

ゆる大同門。眼下に乙密玄武門……」

因みに大同江の鮎の料理は餘程の御馳走である。旅行者は是非味はるゝがよい。

▲兼二浦經營 平壤滞在は五日間所用も略々済みたれば一旦引き

上げて兼二浦に下ることゝした。乃ち萬景岱出帆の汽船慶寶號に接

續せんが爲め河船を雇ふて平壤を出帆したが此日奈何なる天變にや

黒雲俄かに密集して天地を掩ひ颯がて雷鳴降雨となりて、朝鮮では

秋の半ばに珍らしき天候となつた。陰方盡きて船を岸に着け唯ある

民家に入りて雨を避けたが慶寶號は夜の内に出帆した。翌朝南浦丸

に便乗して白雲に等しき霧の江を下つたが午後に至りて今日も亦昨日の如き天候となり江上恰かも太洋の荒るゝが如くである。兼二浦に上陸して暫く同地に脚を止め、一時有名なりし兼二浦の鐵道經營を觀察することゝした。但し兼二浦の經營は僅々一年ならずして中止の悲運に陥つたのである。

。。。。。。

秋風や故郷は七十五良年 鷗 夏

秋風や韓京の表に落托す 全

秋風や君と住むべく歸んなん 全

## (10) 氷上の正月

▲正月と云へば何處も同じ春心、門松立てたり飾り、餅や雑煮でお祝ひをするのであるが旅をすれば色々の境遇に移るもので僕は明治三十八年の正月を奇々妙々なる氷上の船の中で迎へたのである、即ち平素は滔々たる海の如き大同江が一面氷の原となりて其の上に閉ぢ籠められたる中榮丸と云ふ約五百石積の和船の中で正月を迎へた。勿論門松や飾りのあらう筈なく寒氣は零度以下二十度の身を刺す様な氷の上に、あはれ散り残りたる一片の木の葉の如き破れ舟より匂ひ出で、東より出づる初日の出を拜し遙かに故國の萬歳を脱した時には何となく勇ましく又哀しき感想に満ちざるを得ない、人の精神願はくは何時も正月の如くあり度いものだ。

▲先づ其の因縁より説き起すとしやう、僕は大同江畔に移り兼二浦に暫く足を停めて居たが十二月に至り河は結氷し働く人も皆歸つて了つた、北韓に居る人は冬期結氷中多く南韓の温かい土地へ歸り静養して翌春解氷と共に又北韓へ出掛けて來るのである、見よ、雁鴨でさへ其の通りだ、日本では雁は冬居る鳥だが北韓では奈何に寒鳥でも嚴冬には居ることが出來ない、即ち移つて南へ行くのが即ち日本などへ來るのである、ヤア遊蕩旅行と云つた様なものだ、中々贅澤な鳥だ、兎に角雁や鴨迄逃げて了ひ跡は寒氣荒蕩たる野や山や實に何たる殺風景のものだらう。其の殺々たる山野に向つて兼二浦を出發し平壤へ志したのは恰度十二月二十三日の朝であつた。

▲此の日恰かも大風雪にて家を出るとから丸で闇の夜を歩むやうなものである。兼二浦停車場より昨今開通した計りの軍用鐵道に便乘

したが大同江の架橋が未だ出来ないので河の此方で下車せねばならぬ、其處迄は毎日無蓋貨車が往復して居る、併し并は軍用で毎車必ず軌條や枕木を満載して居るから吾々は其の上に乗車した、余は部下の田頭と共に轡を拂つて枕木の上に乗車したが他に監部の役員や工夫など大勢同車した、午前八時四十分發車分岐點（京義線と枝線との）より方向を一轉して平壤に向つたのである。

▲何しろ京義線は速成で設けたものであるから到底完全な工事は出来て居ない、爲に汽車の脱線することも度々にて現に此の間脱線轉覆の爲め即死三名負傷十名など云ふ大珍事を起したこともある、故に車上にありと雖も一寸も油断は出来ない、殊に此口は風雪激しく奈何なる我慢ものも多く人間の顔色は無いのである、然るに中和驛（平壤との中間驛）へ近づく處で汽車は線路屈曲の爲め果して脱線し

たのである、押せ共衝け共動かない、吾々は下車して中和に至り唯一軒の日本人（酒保）の家を尋ねて甘き晝飯に有り附くことを得た。晝飯を済ませば早や午後の二時であつた、此の晝宿るのも不甲斐無きやうなれば人夫を備ふて荷物を負はせ之より平壤迄五里の道を歩むことにした、若し間違へば二三里は夜行する覺悟である、鐵道線路に沿ふて進み漸く大同江畔の平原に出で、遙かに牡丹臺を望み最早一里強と云ふ處で日が暮れた、月の出には未だ時間あれば脚下の危険少なからざれ共滑らぬやうに用心しつゝ歩行して江岸に達する比塞月冷やかに東山より顯はれた、月の光に見渡せば凍り果てたる大同江の物凄さよ。

▲扱て奈何にして河を渡るべきか、船はなし、羽はなし、氷上を歩むべきか………陥落の恐れあり、一夜の宿を求めんにも此の遊旅宿

あらざれば平壤城は對岸に見ゆ乍ら日暮れて路遠しの憾無きを得ない、暫く岸で立つ時に向ふより韓人が来た、就て群數聴けば此處より約半里の上流平壤大同門の前は氷堅くして人馬共に安全なりと答へた。依て又疲れたる脚を曳いて河岸を上り大同門の前へ来た、屹と氷上を見渡せば確かに人馬通行の跡ありて向ふより一人沙つて来るものがある。左顧右眎氷の厚薄を検して沙つて居る、余は田頭と手を引きて生死を共に運に任せ一步……一步……沙りかけた、

「戦々競々として薄氷を踏むが如し」とは真に此事だ、月の光に凝視すれば氷は厚さもの四五寸薄き處は二三寸で縦横に龜裂を生じ歩む毎に早や割れ相な音響を發し、時には響きが前後左右に起つて肌に粟することがある。大同江は上流の平壤に於て河幅約二百五十間一度陥わらば水下數十桴の河中へ葬られるのだ。余は全身に汗し田頭

の手は震ひ乍ら漸く無事彼岸に着いて蘇生の思ひをした、氷は結氷の當初と解氷の節とが最も危いので丁度其の翌日は陽氣の爲め氷裂け馬二頭韓人一名陥落した、無事に沙つたものは天佑と云ふ可した、

▲平壤では或必要上一里下手の架橋點の附近に家を求めた、温突が不潔なので掃除張換へする間余は中榮丸と云ふ和船を假りの宿としたのだ、此の船は御用船に使用されて居たのだが一夜の内に氷に閉ぢ籠められて動くことが出来なくなつたのだ。

▲滔々たる大海の如き大同江が一夜の内に氷結して了ふと云へば奈何にも不思議のやうである、併し中榮丸は其の結氷の前日迄荷揚げをして居たのだ、何うも今夜は急に寒い……凍らねば良いがと船員が語り合ひ乍ら思ひくの夢に入つたが夜半忽ち驟然として百雷の一時に落ちたるが如き大震動と共に船は一丈計り持ち上げられて

舷割れ窓破れ暫時にして震動は已みたるが弾ね飛ばされたる船員が起き上りて見た時には背の江水は既に一面の氷原と化して居た、唯だ中央の流れ急なる部分丈け未だ凍らず居たが艦がて其れも一種痛快なる音響と共に電光石火の如く張り詰めて一大氷原と變化した時には船員すら不覺舌を巻いたそうだ。

▲サテ閉ぢ籠められたる我船を検すれば或は船底を衝き抜かれ或は船側を打破られ最早人力の奈何共詮術無きにぞ乃ち重要な器具は陸に運び船は其の儘來年の解氷期を待つこととした、依て船員一名を留守居とし船主等は歸國して了つたのだ、元來此船は中國通ひの和船に造られ寒國の用意よりも暖國の暑さを凌ぐやう涼み向きに出来て居る故に風は南北へ吹き抜けてお負けに今度の結氷に大穴迄穿たれたのだから左無きだに冷たき氷上は一層の寒氣である。

▲間の悪き時は何事も悪きもので田頭は或る用向の爲め是非兼二浦へ歸さねばならぬやうな事が出来、往復三日の約束で汽車に乗せた處年末になつても歸つて來ない、其の間余一人韓人の温突へ移るのも不便なれば尖張り船中に幸抱して遂に三十八年のお正月を迎ゆるやうになつた。

▲何しろ東西約三百間南北數百哩の大氷原に船を据わて居るのだから其の寒氣は格別で長白山風が吹き荒む時などは水の手と云はるゝ船員ですらヒリ／＼震ひ上がり夜の眼も合はぬ模様である、其れを毛布二枚と蒲團一枚とで寒いとも言はず寝て見せる疥我僕には流石の水の手も驚いて居た。

▲一日二回の満潮時殊に夜間の満潮には氷の唸り方が非常である、遙か下手より漸次上流に向つて潮流のまに／＼一種の音響が氷の下

を太く長く鳴き續けて怪し氣なる聲を發する時には誰でもよい氣味はしない、時には百餘の聲を揃けて鳴泣するが如く、時には鼓や太鼓で囀やし立つるやうな音がする。之は勿論不思議ある筈なく上に張れる氷と下に流るゝ水との間に存在せる空氣が潮流に壓迫せられて音響を發し其れが四方に反響して妙な音聲を發するのだ、結氷時と雖も氷下の水は矢張り干満に従ふて流れ一時間六七哩の速力を保つて居るのだ。

▲二三日來寒氣殊に烈敷大晦日の三十一日は寒さの中の寒い日であつた、折柄留守番の船員は年忘れにとて他出して歸り來らず夫子自から手鍋を提げて氷の破れ目より水を汲み凝りて石の如き大根を切りて盡の残飯を入れ三十七年の年忘れに雑炊の食ひ納めとは吾乍ら奇々、妙々。

▲明くれば三十八年の一月一日先づ大同江の水を汲みて顔を洗ひ、破窓より匍ひ出で、甲板に登り麗々たる初日の出を拜謝した時には人心殆んど神に接して赤心赤誠然ゆる計りである、願はくは男子毎に此の心もて世に活き度いものだ、若し夫れ日光四面を照らして氷原に反射する光景に至つては詩にも歌にも到底我が筆に盡くせぬ。

▲船員が雑炊を造つた、則ち降りて室に坐し先づ三杯の冷酒を汲みて新年を祝し日韓間の子式の雑炊を食つた。船員と二人して一鍋を平げ盡したるは驚くべしだ。船員は廻艦に出懸け僕は一人、奇なる江上の、奇なる船中に、頗る奇なる正月を迎へ、筆を執つて此記事を草した譯だ (元日記)

寒島し前に往けり韓の冬 正月  
瓶として石に我が似る寒さ哉 四

### (11) 雪の牡丹臺

▲花の牡丹臺　と謂へば誠によく聞こゆるものを、奈何に氣候が冬なればとて「雪の牡丹臺」とは甚だ不似合千萬である。されど出征の我が満洲軍は上司令官より下一兵卒に至るまで皆斯かる寒中に雪の山野を跋渉し氷に銃剣を研いて居るのである。其れを想へばひとり吾々が温かい温突むすまに坐つて、ヤレ旅順が落ちた萬歳だ、奉天を占領した愉快だなどと太平樂を唱へて居る場合に非すと大に奮發して、時は一月初五日、友人二三相携ゑて「雪の牡丹臺」見参にと出掛けた。

▲南門即朱雀門　城南の住居より歩を起して離宮の側を北に進み轉がて朱雀門(南門)に掛つたが大牛崩れ落ちたる此の古門を見ずに

過ぐるも無情のやうなれば狂げて一見すべしとて石壁を攀ち登つた一體此の平壤城は支那の北京城を真似て造りしものなれば東西南北の四門など形ち計りは具はつて居るけれ共此の南門など結構矮小にして到底北京の其れに比ぶ可くもあらぬ、詩あり曰く。

朱雀高樓俯市邨　人煙細盡大平痕  
三千年國關防地　十六里城鐵穴門  
遼山鴨從雲際出　清灘鳥入月中籠  
照々聖代無邊警　花落層欄睡老關

壬寅

孟春全取

▲紀念の七星門　吳陋なる城内を北に抜けて少しく西に廻れば觀察府がある、平安南道觀察使の居る處だ、其の四方小高い處に日語學校がある眞藤義雄君の經營する處だ、觀察府を右に歩を移せば直



ぐ丘である、登ること数丁にして松樹蒼々たる間に彼の廿七八年役「哀悼之碑」あり参拜すれば感慨無量往事を追懐して涙を催さぬものはない。其れより数丁にして北門即ち七星門に行く。此の門は日清の戦に於て包圍攻撃せられたる清兵が遂に崩壊して逃走したる門にして日露戦争には敵の騎兵が此の城外迄現はれた紀念の門である。之より見渡せば西北の山野一瞬の中にありて義州街道は山嶽の如く今は京義鐵道さへ斜めに布設されてある。門外は直下せる急斜面にして丘岡は自然の城壁を爲し眞に要害堅固の地である。友の口に句あり

敵<sup>△</sup>落<sup>△</sup>ち<sup>△</sup>て<sup>△</sup>血<sup>△</sup>の<sup>△</sup>跡<sup>△</sup>寒<sup>△</sup>し<sup>△</sup>七<sup>△</sup>星<sup>△</sup>門<sup>△</sup>

▲**感<sup>●</sup>呼<sup>●</sup>笑<sup>●</sup>氏<sup>●</sup>之<sup>●</sup>陵<sup>●</sup>** 七星門を抜け城壁に沿ふて北に行くこと数丁、老松古樹鬱蒼たるものを笑氏の林と云ふ。其の間を潜りて小山を登

れば上に「笑氏の陵」がある、門には平素鍵を鎖して居るが日本人が行けば麓の寺社より小僧出て来りて開放し其の質に幾何か恵みを受くるが例である。門を入り石段を攀ぢ此の有名なる古陵を見るに形容は一の大なる土假頭にして草茫々と生へ格別の感覚を起す可き形状もないが扱て其の前に陳列されたる石像の彫刻物を熟視すれば其の年號幾數世紀を経たるものか考古學者の研究に値ひす可き實に無類の珍品である。其の前の殿宇などは赤塗白塗の修繕を加えて古代の遺物を抹殺し去り一として古色を保存せざる韓人の無風流には驚くの外ない。冬<sup>△</sup>深<sup>△</sup>る<sup>△</sup>御<sup>△</sup>陵<sup>△</sup>の<sup>△</sup>上<sup>△</sup>や<sup>△</sup>松<sup>△</sup>青<sup>△</sup>し。

▲**名<sup>●</sup>譽<sup>●</sup>の<sup>●</sup>玄<sup>●</sup>武<sup>●</sup>門<sup>●</sup>** 陵を出で歩を東方に轉じて老樹の間を行けば龜がて乙密菴の背後に出づ、此の邊一帶甲午の古戦場なれば松樹の枝幹に今猶ほ彈痕を遺して居る。城北の樹陰雪深ふして靴を没せん計

りである。勇を鼓して行進し右斜めに玄武門へと着いた。斯は彼の

原田重吉が押開いたる名譽の門で三歳の童子も知る處である。

冬の花白く咲きけり玄武門

▲要害の牡丹臺 玄武門の東に屹立せるものは即ち有名の牡丹臺

である、急斜面を攀行して其の絶頂に達すれば流石は北關の要害地  
身は恰かも天上にあるが如くである、見下せば眼下を流るゝ大同江  
は今や氷に張り詰めて恰かも一大氷原の形を爲し、遙かの彼岸  
に船橋里は其の昔大島旅團が苦戦の跡を止めて居る。大同門は茫然  
として其の右に聳る半旗市街は井然として其の下に列んで居る、乙  
密臺も玄武門も此處から見れば直ぐ眼の下で平安黃海兩道の山川東  
西南北の地形悉く指顧の間に在りと云ふ可しだ、斯かる要害に據り  
ながら四面より包圍せられて遂に敗走するとは支那兵の弱さ加減が

今更思ひ合はさるゝ。友の一人唸つて曰く

行長の背語りや牡丹臺

▲浮碧樓と綾羅島 牡丹臺の崖下に浮碧樓と云ふのがある。一名第

一江山と唱へ之に隣れるを第二江山とも呼んで居る。八月十五夜半  
旗の官吏が妓生を携へて觀月に出掛くる處で日清の役には支那の御  
大將が此處と觀月亭とで盛んに月見の宴を張り歌舞に耽つて居る間  
に日本軍の背面攻撃を喰つた相であるが、兎も角も觀月には無類の場  
所で下は大同江に臨み上は牡丹臺乙密臺を望み直ぐ其の前に綾羅島  
と云ふ美人の様な島を控えて居る鹽梅は誠に畫中のものである。乍  
併今は冬期の事なれば河吹く風の冷たくして觀月ごころの賑ぎでは  
ない。

灯すや氷の上の浮碧樓

佐保姫の天降りませ綾羅島

▲麒麟窟と觀月亭 浮碧樓の四に七星庵と云ふ寺あり、其の下に

麒麟窟と云ふ穴がある、昔箕氏の時代に麒麟が出た處だそうなる。僕は自身穴の中へ這入つて見たが何もありません。其れより門を抜けて河岸に出で岸を傳ふて下に歸れば岸上の巖を彫りて人名を刻みたるもの共進會の出品を見るが如く其の多くは新しきものであるが中には古きものもある、小四行長の銘があると云ふことで色を探したが見當らぬ多分韓人の憶説であらう。下つて大同門に出で觀月亭を後ろに見て城内を朱雀門に抜けて我宿に歸れば冬の夕陽早や四に傾いて居る。

落日や牡丹臺上白し 暮月  
朝鮮にまだ粉吹かぬ餘寒かな 鷗 四

### (12) 未來の平壤

▲平壤の過去と現在 平壤は過去に於て既に朝鮮の一大都會であ

る、歴史上に現はれたる平壤は随分古いもので兵馬の間に屢々興敗の痕を遺して居る、李朝の建國と共に都を漢城に遷されて平壤は現今の如く北韓の古都となり一時は甚だ衰微したこともあるが最近に至り此の古城は俄かに活氣を帯び其の市街は廣く城南に向つて擴大するに至つた、即ち我が軍用地は城南より大同江の下流萬景岱に至る迄南北約二里に涉つて收用され其の一部分には既に日本人の居住營業を許されて居る、尙ほ城内の各街にも次第に日本人の數を増し大同門通りは云ふに不及朱雀門通りなど殆んど日商の店舗を以て速ねて居る、斯くて。

▲日本人の新勢力　は著しく此處に發顯し戦争前途僅々二三百に過ぎざりし居住民は戦後十倍して約三千に達し我が駐刺軍兵站司令部、鐵道監部等の諸官衙と共に北韓に於ける新日本の勢力を形成して居るのである、随つて當方面に於ける日本物貨の賣行は頗る盛況にして日本語の流行も亦韓人社會に一勢力をなして居る、其他韓商も次第に我商人に習ふて店舖を日本風に改むるあり殊に前兵站司令官の命令に據りて平壤市街は道路の切擴げを斷行され舊觀を一變して往來便利なる一大市街となり萬事に面目を一新して來た。

▲城南の新市街　右の如く既に面目一新の機運に向ひたる上に城南なる我が軍用地には既に鐵道監部の諸設備施行され停車場の設計家歴の建築、道路の設備等漸く經營の緒に就かんとし行く／＼は此處に兵營も建築さるべく新居留地も區劃さるべく平壤城内と相通じ

て前途驚くべき一大都會となるであらう、既に或ものは此の新市街地と城内とを連接せしむべき或る交通機關を設計出願して居る位である兎に角平壤は北韓樞要の地にありて海陸の連絡通じ交通の便開けたれば前途最も有望にして其の發達期して待つ可しである、市街は南北二里人口は十萬を以て呼ぶの日敢て遠きにあらぬだらう。

▲平南線と平元線　京義鐵道が平壤を通過したるは此地の運命を一新したるものにして更に平南線(平壤鎮南浦間)の布設されるものと平元線(平壤元山間)の撰定さるべきは此地の發達を督進するものである、尤も平元線は未だ確定に至らずして京元線(京城元山線)と比較測量中であるが平壤鎮南浦間は既に測量も済み近く起工さるゝであらう、斯の鐵道成るの日平壤は鎮南浦及び元山と相待つて實に北韓三大要地の中心をなすものである。

### (13) 元山と城津

▲元山と迂回航路 北韓の重鎮たる元山は今日韓國西海岸と並た  
 線が薄くして却て直接日本と深き關係を有して居る。今日韓國の國  
 都より元山に往かんとすれば險阻限り無き山道を曆るか然らざれば  
 海路釜山へ出て釜山より更に元山へ向はねばならぬ。現に北韓の物  
 産たる明太魚の如き大豆の如き此の海路に據りて仁川、鎮南浦に輸  
 送され然る後京城又は平壤の商人と取引されつゝあるのである。京  
 城よりも平壤よりも元山へは四十有餘里に過ぎざるを斯かる迂回航  
 路を執る爲めに數海里の遠距離となるの已むを得ざる場合である。  
 茲に何とか近接の策を講ずるは時勢の絶わす要求する處であつた。  
 ▲平元鐵道と元山 元來元山は國都京城よりも平壤の方へ多くの

關係を持つて居る、と云ふのは日清戦争に我が枝隊が元山より平壤  
 へ會したからなど云ふ空漠たる論據に非ずして實際商業貿易の上に  
 最も平壤と接近して居るのである。且又専門家の實地踏査上より見  
 ても元山京城間よりは元山平壤間の方が地勢も適順で道路も平坦だ  
 此に於てか韓國横斷鐵道は遂に平元鐵道の布設と決定した譯である  
 さて此の鐵道が愈々布設されたる曉は元山平壤間は愈々接近して北  
 韓の要港より韓國内地へ向けて運輸交通上の便利を開くのみならず  
 實に。

▲日本海と黃海 とを連結して韓半島を横斷するものなれば其の  
 影響は自然滿洲、北清及上海地方に迄波及して亞細亞の交通界に一  
 新生命を與ふるものである。殊に平壤よりは直ちに平南鐵道に據り  
 て鎮南浦に通ずるを得べきを以て元山は其の有り餘る海陸の物産を

黃海に輸出するを得べく而して毎に欠乏を告ぐる米穀の輸入を平安  
黄海二道より仰ぐことが出来る。實に元山の爲めに利便此の上なし  
で此の鐵道開通の曉は元山の商況頗るに活潑を加へ其の發達期して  
待つ可しであらう。

▲天然の良港 元山は又天然の良港である。波高く岸長き北韓の  
海岸に此の良港を與へたるは實に天の恵み深き配劑であらう。灣内  
は水深くして且つ甚だしき干潮無く四海岸の諸港灣の如く遼遠に化  
することがない。故に本船は絶えず海岸と接近して揚陸荷役總て便  
利を極めて居る。居留地には我が商賈楡比して倉庫の設備などは他  
の諸開港場を凌いで居る。此の地露國軍艦に見舞はれたること數回  
に及び日露開戦中第一の不幸なる土地となつた乍併不幸の後には必  
ず幸運が來るに相違ない。

▲戦争と居留地

一時浦鹽艦隊が跋扈する間は居留民悉く避難す  
るの已むを得ざるに陥つたが其の後秩序恢復してより次第に居留  
民も増加し殊に最近北韓軍が活動を始めて以來此の地は軍事及商戦  
上の中心となつて一時的の商民激増し居留地に溢れて遂に韓人街に  
氾濫し家賃の如き俄に昂騰して韓人温突一室十數圓てふ珍値を現は  
すやうになつた。乍併斯の如きは餘り悦ぶべき現象に非ずして北韓  
に於ける戦後の經營は矢張り舊來居住せる有力者の奮發に俟たねば  
ならぬ。此地には又富有なる清商多く其の商取引は頗る活潑にして  
北韓全體より西比利亞に沙り堂々と門戸を張つて居る。

▲多望なる城津

元山より海路十時間にして北方の新開港場城津  
に達することが出来る。此地は最近迄封鎖され居留官民共引揚げて  
居たが戦後新たに領事分館も開館され副領事も出張して居留民も次

第に歸來又は新渡航して來た。此地は開港日淺く加ふるに戦争引揚等の爲め未だ見るべき成績を現はさないけれ共戦後北韓の貿易港として元山と共に大に發達すべき機運に接して居る。輸出物産としては沙金、牛皮、牛骨、海産物等あれ共此地は寧ろ輸入港として有望である、綿絲、綿布、鱒寸、石油等戦後大に輸入を増すであらう。

▲北方韓人の露化 咸鏡道の人民は從來動もすれば露化せんとする形跡あり、中には全く妻子を携わて西比利亞へ移住するものも珍らしくない、餘程露國が懷柔策を施したものと見ゆる。現に我が北韓軍が進發する時にすら何等か妨害を加わんと試み鏡城附近に在つては露探の川沒甚だしく人民は全く露軍の用をなしたと云つても其位である、斯かる風習なれば戦後に於ても何かの行迹ひより時々日本人排斥熱を起さないとも限らない、之を鎮撫して彼等を日本化

せしめ北韓方面より進んで西比利亞地方に迄我が勢力を扶植するとは今級元山及咸津に居住する官民諸氏の義務なりと云はねばならぬ海外に踏み出す以上は日本人としての任務實に大なりと云ふべしだ

。 。 。 。 。

秋晴れて韓山に鳥渡りけり 四 月

國が引きし嗚子の舞や韓の島 四

(14) 清川江と大寧江

▲一月の結氷中 清川、大寧の兩江を見んとて月の廿二日平壤を  
出發して北に向つた。零度以下二十度の寒氣は凄愴として身を斬る  
計り耳朶も落つるかど怪まれたが我が征露軍が滿洲の野に轉戦せる  
を思へば吾人の勇氣は湧然として寒氣何かあらんと叫ばざるを得な  
い。平壤より順安迄軍用鐵道が開通して居るので之に便乗し順安よ  
りは徒歩にて北行した。其の日の夕方上北洞と云ふ村里へ着いた頃  
は脚疲れて殆んど一步も運ばすことが出來ない、路傍の雪の上に腰  
打掛けて休息した。

▲山中に日本婦人 上北洞と云ふは山間の僻村である、何處か一  
宿すべき家はあるまいかと部下の山本を派して偵察せしめたが其の

報告に據れば洞に日本人あり快く一宿を辨すと云ふことだ、雖有し  
と疲れたる足を曳いて行けば門構の大きな朝鮮家で吾を出迎へた  
る其の人は年齢尙ほ三十に充たざる日本婦人である。髪は英吉利卷  
に結び辯は爽かなる東京辯で汚醜しくは御座いますけれどもお構  
ひなくばサア……………と時せられた、斯の如き山間に見るも滑き日  
本婦人……………繪にあり相な話である。

▲圓滿なる家庭 靴を脱ぎて座に上り先づ茶菓の饗を享けて少時  
語る内今年漸ふ五歳になる婦人の一子は歸つて來た、近處の韓童と  
遊び暮し足の傷けるをも知らずして血を出しながら母さん此れ何  
處の叔父さん?と問ふ。可憐。余が菓子など與ふる内早くも馴れ  
て膝にあり色々罪なき思さを始めた、雖がて父なる主人も歸り來り  
一應の挨拶済みて茲に主客打混せて楽しき會食は開かれた、主人は



東京の人で某組に屬し鐵道工事の請負に従事し妻子打連れて此の山中に住ひ、早や半歳を経過して多少の不自由位は世外の安氣に忘られると謂つて居る。此の圓滿なる家庭!!! 奈何に樂しき境遇ではあるまいか、日本の如く親や親族の義理にのみに據まれたり、又は先祖の墳墓をのみ守るのが敢て必しも家庭の本義ではあるまい、未來の夫たり婦たる人々よ、新婚旅行を海外に試み、彼の英人が爲す如く新夫新婦相携つて海外に新領土を開拓し樂しき家庭を建設しては何うであらう。

▲新安洲に着 翌早朝出發し行程三里にして新安洲に着いた、新安洲は安洲より三里下手の清川江畔にあり我が軍用鐵道停車場として新たに經營せられた處で將來は大に發達の望みある處だ。唯だ一の不便とするは此地折角海に面すれ共海上遠淺にして舟楫の便悪敷

小蒸汽船の外寄港することが出来ない、和船と雖も滿潮時にあらざれば近づけない、此點に於て清川江は大同江に劣ること數等だ、此夜建築班に三上班長を防ひ會談時餘、辭して後通稱を學校と呼ぶ山上の監部宿舎に一宿した、毛布一枚火鉢一箇嚴寒眠を妨げられた。

▲氷の清川江 明ければ廿四日余は三上班長と共に清川江に至り其の氷狀を見て驚いた、高さものは壘々として峰の如く低きものは落々として谷に似て居る、其の間に處々鏡の如き平面の氷を見れ其多くは是れ山谷の形狀を爲して居る。思ふに清川江は湖の干満最も激しく且つ潮流急なれば結氷は幾回も破られ其の破片重なり合つて又凝結し遂に河一面斯かる變形を爲せるものであらう、余は班長と相遊んで今や此の氷の上に立ち河幅五十チャイン即ち五百五十尺の氷河を沙り始めた、時恰かも滿潮時に際し氷は怪し氣なる音を發し

て何となく動搖するが如くである、俄て之を班長に質問すれば嗚呼驚くべし……満潮に際して。

▲結氷浮ぶこと七尺 の高さに至り干潮に際して又七尺落下する  
そうだと、今恰かも満潮時なれば氷は浮びつゝあるもので上下左右怪音相傳わて其の凄しき氣味悪さ言ふ可らず、余は頗る不安に思つたが班長は笑つて平氣で歩いて居る。此の時忽ちメリ／＼と音して余が脚下の氷破れ其の間より水が湧き出でた、余愕然疾走すれば班長は笑つて靜かに其の破烈を眺め余を招き説明して曰く、此の河の満潮は通例八九尺より十五尺に至り大満潮には二十尺以上に登るが今日は恰かも十四五尺の満潮なれば今氷を六七尺も持上げたれど尙ほ數尺持上ぐる餘力を有つて居る、故に氷の割れ目より氷の湧くのは當然で敢て驚くことはない。丸で地理學者の講釋を聽くやうだ、余は

班長を促して急ぎ彼岸に涉つた。

▲忽ち見る大寧江 地圖にて見れば清川江と大寧江とは河口に於て相會せる様に現はれて居るが其の間には約三哩に渉る陸地ありて長く半島形に突出し以て兩江を區分して居るのだ。余は三上班長と共に暫時此の半島上に休憩し更に西に向つて歩行時餘にして忽ち大寧江畔に出た、大寧江は略々清川江と同じく河幅約二百間にして共に韓國の大河である。而して余が北韓航路に觀察せる何日里浦は大寧江の右岸にありて清川江の左岸なる新安洲と相對して居るのだ。大寧江の結氷は清川江の結氷よりも一層雄大にして氷の山形を爲せるもの丘狀を畫くもの相連續して殆んど別世界の觀を爲して居る、之を涉つて約七八分迄進んだ時班長は曰く、之より先は多少危険なり用心せよ、と余頗る薄氣味悪く強めて引返さんことを求めた、班



## (15) 鎮南浦下り

▲凡そ韓國渡航者で二年三年と暮す内に感冒又は熱病に罹らぬものは殆んど無い、殊に熱病は俗に朝鮮熱と云つて矢張りマツリアの一種に相違無いが頗る流行するのである。が獨り僕は五六年滿韓地方を漫遊して未だ一回も其れに犯された事無く人も吾も不思議に思つて居た位であつた。然るに新安洲旅行より歸來して後間も無く感冒に罹り久しく群中に呻吟したが其れが平癒すると今度は又遺傳性の僕麻質斯に醫された。全體平素無病健康のものが一朝病氣に弱いは往々ある話で僕なども或は其の方かも知れぬ、殊に僕麻質斯は一向醫藥の効能が見へぬから遂に温泉療養と決し黃海道の安岳アムンの温泉へ行くことにした。安岳は鎮南浦から河を渡つて四里の山奥にある

有名の温泉である。

▲元來朝鮮には火山が無いから温泉も無さそうなるが中々左様でない。黃海道には八ヶ所もあり平安道にも五六ヶ所あるそうだ。其れから見ると或は黃海道平安道へかけて一條の火山脈が遣つて居るのかも知れぬ。彼の黃海道ウナムの九月山クムンなど云ふ火山脈は昔時噴火したと云ふ話も土人間に傳はつて居る。現に僕の行かんとする安岳の温泉は九月山の直ぐ下にあるのだ。序手に申すが朝鮮には火山の無いと共に地震と云ふものも殆んど無い。極々稀れに微動することもあるけれ共先づ皆無と云つてもよい位だ。尤も之は單に朝鮮のみならず支那西比利亞の如き大陸は皆同様である。東京などで地震の恐は人は宜しく大陸へ移住すれば妙であらう。

▲温泉療養後僕は更に滿洲旅行を企つる積りであつたから一切荷物

を行李に纏めて、幸ひ知友の古田君と波佐間君が鎮南浦へ行く際であつたから共に相携へて四月三日に平城を出發した。四月三日と云へば即ち我が神武天皇祭の祝日である。此日恰かも京義鐵道にては大岡江の大架橋開通式を舉行して仁川より山根少將(鐵道監)以下來臨し其の式を擧ぐる處であつた。恰度吾々はサンパンを雇ふて架橋の下に碇泊せる汽船南浦丸に漕ぎ付けんと急ぎしが纒かの差で南浦丸は出帆して了つた。已む無く江上へ船を停めて開通式を見て居ると、華やかに裝飾せる汽車は右岸より國旗の間を滑りて橋上に懸り、徐々と進行して左岸へ着し、今度は左岸より速力を早めて疾風の如く快走し數百間の長橋を無事に通過して右岸に着いた時には萬歳の聲鳴り渡つて不覺吾等も喝采した。其れより數千の來賓は何れも橋を涉りて思ひくりに賛詠を加へ或は無數の韓人が珍らし相に橋

上を往來するなど随分面白い光景であつた。

▲南浦丸に乗り遅れた吾々は一旦宿に歸つて當日の祝盃を擧げ、兎角する内に汽船大同江丸が今夜出帆と云ふ報を得た乃ち三人打揃ひ定刻に先立つて船へ着いて見れば早や船客満員の姿である。其れも過半は韓人の客である。余は例に據りて行李を甲板の上に置き櫓のみ携へて室に入り三人小さく隅の方へ陣取つたが船は満潮を待ちて午後九時出帆した。兼二浦へ着いたのは翌午前の二時頃であつたが古田氏は一旦此處へ上陸するので僕は甲板の上迄見送り其時恰かに余が行李の存在を認めて室に歸り假寐すると間もなく午前五時頃鎮南浦へ着いた。余は安眠せる波佐間氏を起し共に甲板へ出て見れば斯は奈何に僕の柳行李が見えぬ。奈何に捜しても無い、附近に蟬集せる韓船を一々點檢すれ共見當らぬ、一旦岡へ上つて取調へても無い



が家賃一ヶ月拾五圓など云ふ空前の相場を決はして居るのである。此等の渡來者は別に之と云ふ目的も準備もないので雖がて宿料にも差支ゑ中には衣類など賣却して本國へ逆戻りするものも少なくない。斯かる有様であるのにオハエー號には又もく、此種の渡來者が滿船して居る。水の流れて人の身の上、其の行く末は何うであらう。

▲三里は五里 間も無く渡船二艘帆に風を孕み波を蹴つて彼岸より此方へ渡つて來た。則ち其の一に飛び乗つて解纜すれば南風強く吹き荒みて黄海より寄せ來る波は大間江を呑まんとし朝鮮式の小さき渡船は恰かも木の葉の如くである、何時見ても胸の悪きは河の水色と乗合韓人の面色である。雖がて四十分にして彼岸に着いた此れから安岳温泉迄は日本里數の三里と云ふことだ、其處で荷物を韓人に負はせ靴紐締めて發足したが凡そ半里を過ぎて聞くも三里、一里

を歩んで聞くも三里、少しも接近せざるには驚くの外無い、畢竟三里はお世辭的の掛値にして其實五里もある可しとは着いて後に思ひ合はされた。朝鮮人がお世辭に長けたること之を以ても證據立てられる。

▲日語擴張主義 途中斷髮洋裝の韓人あり、彼等は進歩會員である、又朝鮮婦人にして頭に物を載せ同じく温泉へ行くもある、僕は彼等と前後して行けば左右より色々の事を話しかけられ其の應接には閉口した。一體僕は日本語擴張主義で自分が韓語を言ふよりも韓人をして日本語を語らしめんとし平素勉めて韓語を排して居たが、仁川や鎮南浦の如き開港場では一向差支ゑないけれ共斯う山の中へ遁入つては到底主義通りにやる事が出來ぬ、其處で已むを得ず韓語を使つたがお恥かしいかな。十分の應對は出來ぬのである。

▲温泉と日本人

行程約五里非常の疲勞を覺えながら先づ無事に温泉へ着いた。丁度温泉真向ひの宿屋へ宿つたが韓人の家としては比較的奇麗である、日本人は居らぬかと聞けば他の家に賣藥者二名居るが今は何處へか行つて留守だと云ふ、其れから日本人は冬期結氷中に深山來浴するが春から秋へかけては餘り來るものがないと云つた其れは其の筈である結氷中は商業が閑だから温泉へも來るだらうが解氷後は貿易多忙だから來る客が無い譯だ。

▲異臭紛々 糞がて晩食を持つて來た、日本人の食べるやうなものではない。福神漬一個を開き兎も角も晩餐を済ました、其處で小僧に案内させ食後先づ一浴を試みたが時既に夕暮なりしを以て明かに水色を認むることは出來ぬけれ共何となく皮膚に心地悪き様である、お負けに韓人が深山湯浴して異臭紛々鼻を衝き中々堪つたもの

でない早々にして逃げ歸つた。

▲免かれぬ湯浴

翌日から兎も角も一日三回宛つ入浴することゝした、朝は未明〓未だ薄暗き比〓入浴するに韓人先生早や先に這入つて御座る。そして晩は殆んど十時迄も入るのだから所詮韓人との湯浴は免かれない、若し之を避けんとせば夜半より鶏鳴の間をでも撰まねばなるまい。因果なことだ。

▲甲乙の二軒

温泉に甲乙の二軒ある。二軒共に男女の室は別たれてある。甲は西にありて結構は稍や小さいけれ共湯が熱くして病氣によく乙は東にありて甲よりは廣く且つ甲程に不潔ではないけれ共湯は少しく生温で利き目が少ないと云ふことだ、僕は多く乙へ入浴して波多に甲へは這入らない、并は到底甲の不潔に堪へぬからである。



▲鼻持ちならぬ 韓人がどれ程不潔なものかと云ふことを説明する爲め茲に温泉の内幕を叩いて見やう。第一韓人は大小便の跡で手など洗ふことを知らぬと共に何處の湯に入つても掛り湯などするものはない。其の儘ズボリと入るのは未だよいが自分が顔を洗ふ其の湯の中へ唾を勝手に吐き放題である。現に湯の上には唾や痰が澤山浮いて居る、其れから彼等は湯の中で多く小便をやる。湯が變に臭いのも其の爲めだ。多少奇麗好きの奴は湯から上がつてやつても直ぐ湯壺の側でするから同じく湯の中へ這入つて了ふ。甚だしきは湯の中で脱糞する奴もある。之を彼等に聞くに入浴すれば餘り心地よくして放尿せずに居られないと云ふ、到底鼻持ちのならぬ話だ。幸ひ温泉が噴出して居るから絶えず新陳代謝するやうなものゝ心地悪くて永くは入られない。僕は多く湯口で掛かりサッサと歸つて了つ

たのである。

▲安岳と屹紅

此の温泉を一般に「安岳の温泉」と云ふけれ共安岳郡の安岳町は此温泉から南方二里にありて郡守の居る處だ、温泉の地を別に屹紅(フロン)と呼んで居る、尙ほ色々の見聞があるから次節に於て述べるとしやう。

- 春雨や温泉宿の長煙管 野月
- 春雨や温泉宿の長煙管 野月
- 春雨や温泉宿の長煙管 野月
- 門島に唐大槓を踏きにけり 岡
- 五歩の島韓人恋を伴りけり 岡

(17) 屹 紅 の 見 聞

▲桃●源●の●有●様● 此處屹紅の温泉村は眞に天與の好地形である。黄  
 海道第一の高山脈たる九月山は高く四方に聳えて其の支脈には朝鮮  
 には珍らしく松柏の類が榮えて居る。其の間より湧き出づる清き泉  
 水は小川となりて村の東南を斜めに流れ村民は皆此の水を飲用に使  
 つて居る。南方は平坦にして田あり畑あり遙かに山を隔て、安岳に  
 通じて居る。今や恰かも春の盛りなれば氣候遅れたる朝鮮も流石に  
 柳楊の芽を吹きて山の麓や軒の側、桃李一時に花を開いて居る。世  
 界は駭々として進み競ひの絶へざる時に、此處屹紅の地は奈何なれ  
 ば斯くも太古の有様であらう。

▲温●水●の●噴●山● 村は纒かに五十戸に過ぎぬ、温泉を中に包含して

街の形を爲して居る、其の多くは宿屋であつて諸方より來浴する客  
 を宿めるのである。入浴す可き温泉は甲乙の二處に過ぎぬれ共、  
 此の邊一帶に温水噴出して米を煮るにも洗濯するにも自由自在であ  
 る。温泉の質は確かに硫黄泉である。  
 ▲韓●人●の●家●族●生●活● 僕は韓人の家族的生活の裏面に立入つて面白  
 い觀察を遂げた、否遂げさせられたのである。讀者と共に之を研究  
 することも穴勝ち無益では無いであらう。サレ僕の宿つて居る家は  
 此地では先づ第一等の家で可なりの財産家と見て宜しい、主人の姓  
 名を高承周と云ふが之は家の娘の婿養子で何でも鎮南浦邊から來て  
 居るそうだ、娘の父親は死んだと見れて母親一人が残つて居る、サ  
 ア此の母親と云ふのが女主人の榮のものらしい。それに今一人娘の  
 兄がある。本來云へば此の兄が家督相続す可き筈であるが不幸にし

て兄は醜態であるから未だ妻も迎へずに娘の方へ養子を取つた譯である。一家は以上四人で外に召使ひの小僧が一人ある。

▲母親の酒狂 日本でも養子と云ふものは兎角巾の利かぬものであるが支那や朝鮮の如き宗族と年長者を尊ぶ國にあつては一層親の権力が強い、殊に此の家の母親は尋常ならぬ女豪傑と見えて三十歳近くの婿養子の子供の様に叱つて居る、此の母親は又非常に酒が好きと見わて時には朝から飲んで居ることもある、酔つたら手を拍ち足を揚げて歌ひ舞ふのが十八番でお客でも何でも丸で女達のやうにする、尤も日本人には多少遠慮するらしい。

▲親子兄弟の分捕主義 自身が酒飲みの際に客ん坊で錢と云つたら何でも先に引たくり決して養子にも遣らぬらしい、其れでは養子が立たぬから養子は養子で自分の懐中に入つた金は一切仕末して出

すこと無く始終母親と睥み合ひである、然るに今度は悴の醜態が中々神経の鋭い奴で常に母親や養子の眼を掠めユツ／＼と金を貯めて居る故に客人の宿料でも店の資上金でも取つたら取つた奴の所得で他は利益の恩典に浴することがない。収入は其れでよいとして支出の時が何時も大喧嘩である、例へば石油を仕込む時の如き親子兄弟相争ひて其れは／＼見られたものでない。

▲毎日の争論 一體朝鮮では婦人の権力が中々強く決して外見のやうなものでない。殊に此の母親は男優りで時に近處の男などを叱り飛ばし又た現に僕の面前で養子を抑え草履を持つて其の面を打擲したことがある。母が此の通りであるから娘も幾分か其の氣を受けて毎々我意を張りて養子と争ひ時には双方がボロ／＼涙をこぼしながら掴み合ひすることもある。其の時醜態の奴は必ず出て行つて

我が妹たる娘の肩を持ち養子に打つて掛るのである。親子四人が毎日く何か争はぬ日とは無く母親の酒狂と相俟つて其れは面白い家庭を作つて居るのである。

▲余に金錢を托す 或夜の事であつた、宿の近處に火を失して今にも延焼せんとするが如く容易ならざる混雜を演出した。養子は兎も角も現場へ馳け附けて衆人と共に消防に従事し娘は泣くく手荷物など仕舞ひかけたが、母は流石に消防に注意し睡醒をも促して現場へ出張せよと命じた。其處で睡醒は突然余が室に入りて懐中より袋を取り出し手眞似にて之を余に托し必ず他の家人に示すなからんことを求めた、母は勿論錢である。之より先き余は現場の有様を見るに火勢熾んにして甚だ消防の手緩き様なれば運動勞々一つ飛込んで日本人の働き方を示さんかと思ひ今我室に戻りて衣を改めんとする

處であつたが睡醒は切に余を止め且つ余が出で行けば留守中必ず盗入りて金品を盗み去らんと云ふ。余も聊か迷へる内彼は早や其の衣を脱ぎ輕装して出發し且つ呉れくも室に止まりて依托金を母親や兄弟に見せるなと頼んだ。余が遂に之を請するや彼は安心して飛出した。

▲安心して受取る 火は都合よく鎮まつた。彼は温泉に一浴して馳け戻り余に叩頭して拜謝した。而して別に金を請取らんとせざる故余が取出して之を渡せば頻りに其の身に重き振りを示し暫く余に預かつて呉れよと頼む様子である、成る程韓貨數包を身に着くれば重いに相違ない、乍併余も厄介であるから強めて之を渡せば彼は別に改めもせず安心して其の儘之れを身に着けた。

▲恐る可き家庭 讀者諸君よ僕は外國人である斯程迄に僕を信用

する彼が何うして之を其の母に見する勿れと頼むのだらうか。又母親が何うして其の子から外國人たる僕程の信用をも得ないのだらうか。嗚呼人の性は本と善なりと云ふ決して嘘ではないのである。唯彼等の家庭が遂に今日の風習を作つて親子兄弟相食むに至つたのである。上は朝鮮國王より官吏平民に至る迄皆斯かる性情を享けて遂に今日の韓國を爲して居るのである。家庭は實に恐る可きものではないか。

亡國の山河を靡らす月千里 野月  
韓の宿一夜眠られず山愁し 岡

### (18) 再び温泉行

▲醜態の出迎へ 先の温泉療養は五日限りで一旦鎮南浦へ立ち歸つたが、幾分か其の効を覺える様だから再び入浴することに決し、差當りの用事丈け済ませ今度は二週間滞在の用意をして四月二十三日鎮南浦を出發した。其の日の夕方無事温泉場へ着いて矢張り前の家へ宿泊した。例の醜態は飛んで余を出迎へたのである。

▲月夜の餅搦き 翌二十四日は無事に過ぎ其の翌二十五日の晩である。余は蚤なごせりて寝られぬ儘に午前一時頃家人を起すも氣の毒と思ひ手づから燧燭を提げて門を開き直ぐ其の前なる温泉へ入浴した。實は晝間の五月蠅き韓人の混浴を避けて獨り氣儘に入浴せんとする希望であつたのだ、其の時隣家の韓人であらう夫婦が庭に出



温泉に入浴して朝餉を済ませ之より陸續に取掛らんと洋服着換ふる時可笑しいではないか家の主人は何處よりか鞆を提げて馳せ戻り之が河の側に捨てよあつたと云ふ。見れば鞆は胴中より切り破られて總ての物品は一度取出されたものである。之を検するに時計と金銭と西洋蠟燭とを盗み他の書類や諸道具は一品も失せて居ない。而して時計の包皮丈け残つて居るなど韓人にしては中々上手の盗賊である。

▲鎖南浦へ使者

既に大切の書類は戻り被害品は時計と韓貨のみなれば斯かる小さき物品を搜索するも容易に出で来る間敷と思ひ此の取調べは最早中止した。乍併路銀には差支ゑざるを得ない。依つて人を雇ひ鎖南浦へ通知して金の來る迄余は温泉に滞在することとした。先には鎖南浦下りに一身代残らず盗られ今復た時計や鞆迄し

てやらる、餘程賊縁の多い年廻りと諦めて覺悟す笑はずには居られない。(因みに後又韓人に靴を盗まれて佛の顔も三度)

▲韓人と盗み根性

韓人が窃盜に巧みなるは其の先天的特性とも云ふ可く殆んどあらゆる人間が盗み根性を具へて居る、韓人社會では巧みに盗み果せるものを非常に稱賛し家に歸りても大に褒めらるゝそうである、だから益々盗みも上手になり盗み根性も發達するのだ

▲劇薬数瓶を盗む

温泉に日本人の賣薬商が居る、東京の人で普通の賣薬もやれば又診察の上相應の薬も盛るので大に持て囃されて居た、スルと一日其の近處の家から急病人がある今死にかけて居る直ぐ來て呉れよと云ふ矢の催促で先生早速診察機と注射器とを持つて駆け付けた。病人は果して癩癩性のものであつたから一回の注射よく効を奏して立ち歸つた。所が留守中何者か忍び入つたと見ゑ棚

の上の劇薬数瓶が失せて居る、詮議しても分らぬから其の儘にして置いた。

▲面白い夫婦情死

然るに其の夕方に至り近處の家に夫婦の頓死が出来たと知らせに來た。往つて見れば夫婦共黒血を吐いて死んで居る。而して其の傍に今朝盜まれた薬瓶が開かれてある。察するに日本醫の薬でさいあれば何でもよく利くものと思ひ盜んだ薬を夫婦して飲んだものと見わる、所謂自業自得だから仕方がない、丸で夫婦情死のやうなものだ。何と面白い盗賊ではないか。

▲狐鼠々々泥棒

兎に角韓人の盗賊根性には呆れざるを得ない。其れも一國を取るとか一城をせしむるとか云ふ豪氣のものは一つも無く皆狐鼠々々泥棒に過ぎぬのである。就中荷物の負ひ逃げとか、洋傘一本、靴一足など云ふ泥棒は最も多く往々朝鮮通でさいやられ

るのだから新渡航者などは充分注意せられねばならぬ。

▲浴中の研究

温泉滞在も最早厭いたから鎮南浦より人の來るのを待つて引き上げた。此の永い間の入浴中僕は日本人と朝鮮人との體格及び體質に就て自づから色々の觀察を試みた。勿論未だ精密とは云へぬが兎に角次節に於て述べて見るとしやう。

秋風や櫓に干したる唐衣 暫月  
柿を取る鴉し道はぬ閑居かな 鷗 且



### (19) 韓人の體格

▲裸體的・研究 朝鮮人の人種及體格等に就ては夫々研究せられた書物もある。僕は未だ其れを悉くは讀んで居らぬ、故に學問上より見たる研究は余に於て資格がないのである。唯何事も實驗に基づきて自分が見た有りの儘の事又考へた儘の事を茲に書いて見やう、之を裸體的・研究とでも云はうか自分も朝鮮人も裸體的・體相對して居るのである。

▲野生的・發育 朝鮮人の體格は概してよく發達を遂げて居る。先づ其の身長は平均五尺四五寸で日本人の平均よりは随かに二寸位は高い。手足は之に準じて長く伸びて居る胸部と筋肉との發育は何うも不充分であらうと思はれる、少くも日本人の如く發達しては居な

い。思ふに彼等の體格は決して鍛練せられたるものにあらずして自然的に野生の如く成育したるものである。日本人の武術家や又は體操にて練り固めたやうの體格は決して彼等に於て見ることが出来ぬ。

▲徴兵・不合格者 朝鮮人は肥滿せるものが少ない、一見甚だ肥太の様に見ても其れは顔が膨れて居るのである。顔丈けはゾク／＼膨れて肥滿らしく見ゆる奴も裸體になれば左程肥えては居ないのである。我國では稀に非常の肥滿漢を見るが朝鮮ではさる特別の體格がない、殊に若いものは丈けがスワリと高くて其の割合に横の釣り合はぬ連中のみだ。日本式の徴兵検査には不合格者が多いたらう。

▲毛・少なし 朝鮮人は毛が少ない、至つて少ない、斯く首へば人は怪むであらう。街上の韓人悉く美髯公ならざるはなし何を以て少なきやと、然り顔丈けは奈何にも鬚髯が伸びて居る、併し裸體にな

れば、<sup>コソギ</sup>筋のやうなもので手足に毛のある奴は一人もない、日本人は十人が十人多少手足に毛の無いものは無く中には胸毛の男らしいのもあるが朝鮮人と来ては第一腋の下に毛のある奴が少ない方だ。男子にも往々あるが殊に婦人と来ては頭髪の外全身無毛のものが最も多い、恐らく百中の八九十だらう。

▲彼等の脚と指　朝鮮人の脚は灣曲して居る、直立して左右の膝の間の隙かぬものは一人もない、尤も日本人でも灣曲せるものは少なくないが韓人のは一層甚だしい、之は彼我共に幼時人の脊に負はるゝ習慣より起り居常眠坐することが第二の原因をなすのであらう、其れから韓人の足の指は第二指第三指が非常に渡伸して親指よりも尖出して居る之は朝鮮の履物の爲めで彼等は自慢して居る。

▲背の強肩の弱　朝鮮人は肩が甚だ揚らない、我國の婦人の肩の

やう弓形を爲して居る、全時に肩の力と云ふものは殆んど無い、彼等の肩に物を擔がしたら憫れなものである、併し乍ら背に物を負はしたら驚くべき力がある、強い奴は五十貫乃至六十貫のものを負ふて平氣で居る、彼のチケタンと呼ぶ人夫の輩は皆之れである。

▲皮膚の光澤　韓人の皮膚は實に胸の悪き皮膚である、メルと油氣が多く其の弊少しも光澤がなく何となく陰氣でトス黒い様である。尤も中には白色で甚だ美しい顔の男女が無いではないが皮膚に光澤の無きは同一である、日本人や西洋人の皮膚は光りがあつて活きくとしたのが多いが之を假りに積極的皮膚と云へば韓人のはその反對に消極的皮膚である、日本人や西洋人に比して到底皮膚の光りを争ふことは出来ぬ。

▲韓人の臭氣　韓人の臭氣は確かに一種特別である。僕は最初彼

等が臭氣の原因を食物に歸し臭きものを食ふ結果口より臭き呼吸を吐くのだらうと思つて居たが其の實決して口のみではないらしい、全く彼等の身體が臭いのである。其の臭氣は何とも形容することが出来ぬが犬ならば確かに遠方から嗅ぎ分けるであらう。

▲従前の穢多 種々なる點より觀察して韓人は日本人と同人種だらうか奈何だらう、此の問題は人種學以外現在の實見に就て甚だ迷はざるを得ない問題である。假令日本人は南洋より來れる天孫人種の末にして韓人は滿州より來れる秣耜或は齊東野人の末なりとするも双方稜證として比較對照する時は奈何なる學者も其の判斷に迷はざるを得ないと思ふ。余は奈何なる方面より見るも朝鮮人は吾人と別種族なりとは言ふことを得ない。さらばとて全く同人種なりと言ふことも出来ぬ、先づ韓人は我國の以前の穢多のやうなものだらう

と思ふ否夫れに相違無いのだ。

▲穢多語と朝鮮語

歴史は既に之を証して居る、昔韓人の我國に移住せるもの少なからざるは掩ふ可らざる事實であるのだ。而して其の或部類が穢多となれるも事實である。遺傳は争ふ可らざるもので現に今日の韓人の風相、舉動、性質等が昔の我が穢多に少しも違はない。余が幼けなき時の肥應によれば我國の穢多村の生活状態が今日の韓人生活によく似て居るやうで韓人の臭氣を嗅ぐ毎に昔穢多の臭ひが斯くありしよと思ひ出さるゝ心地がする。而して尙ほ驚く可きは昔の穢多の物言ひ口調が朝鮮語の口調によく似て居るのみならず何處やら同一の音もあるらしいやうだ。勿論韓人にも扶餘族、天降族等の優等人種も混じて居るが因襲の久しき遂に穢、貊、鮮卑等に同化されたのである。

▲我が新平民　さらば韓人は決して我等と別種族とは言はれないではないか。既に我國には種多なるものが一人も無く昔時の種多は今日の平民であるが故に日本人を一般に日本種族と呼ぶ以上は韓人も亦我等と同種族たるに相違無いのだ（但し日本人の内にも種々なる人種あるは暫く別論）此點より見れば朝鮮の二千萬民は皆悉く我國の新平民と云ふことが出来る。然り確かに我が新平民に相違無いのだ。

高麗人も白衣の秋を嘆じけり　　野月  
露晴れて韓山に風掃かりけり　　同

### (20) 韓 人 と 醫 藥

▲醫藥と韓人の體質　韓人は實に動物性である、醫藥を施してこれ程よく利く人間は世界中他には有るまいと思はれる。下劑を施せば下痢、發汗劑を施せば發汗、思ふやうに鮮かに利き目が染はれて千に一つも間違ひが無いそうだ。之は平素藥を餘り用ひ無いのが其の原因だらうが數千年來遺傳し來れる習慣性は確に彼等が病弱に對して反抗力が強く快癒し易い體質を成して居る。現に日本人ならば腕一本切斷を要する程の打撲傷でも韓人は些少の治療で放任して置けば自然に其れが快癒して來る。殆んど不可思議な位だ。

▲草根木皮と大國醫　古來朝鮮には格別の醫者と云ふものは無かつたのだ、賣藥者即ち醫師で醫師即ち賣藥者である。此の習慣は今

も猶ほ残存して我が賣藥行商者を見れば皆醫者と思ひ診察兼施藥を乞ふのである、で其の醫者たる賣藥者が奈何なる藥を賣つて居るか云へば勿論支那風の草根木皮の一部分で幼稚極まつたものである、故に韓醫よりは比較的發達せる支那醫者が大に歡迎されて之を大國醫と稱し日清戦争迄は非常に流行し平安道、咸鏡道の北韓地方より慶尙、全羅の南韓に到る迄所として大國醫の開業を見ざるは無かつたのである。

▲甲午役と日本醫

然るに日清戦争は支那の政治的勢力を半船より驅逐すると共に此の流行せる大國醫の營業をも殆んど停止してつた、而して大國醫に代つて韓人の信仰を博したるものは實に我が進歩せる日本醫術にして其の確實なる効驗の前に彼等は平伏したのである、同時に日本の賣藥が大に歡迎され延林八道到る所日本賣藥

商の影を見ざるのみならず今や滿洲より支那本土迄我が賣藥困難ならんとする勢ひとなつた、中には日本人の影さい見れば醫者と思ひ追掛け來りて病人の状態を陳べ施藥を乞ふて旅行者を苦める地方もある、信用の高きこと推して知るべしだ。

▲婦人診察の困難

茲に最も困難を感じるは婦人診察の一事である、日本醫師は大抵診断をした上で無ければ滅多に韓人に調劑せず韓人も亦近頃進んで診察を受くる風になつて來たが婦人と來ては斯國の習慣上容易に人に顔を見せない、況んや日本の醫者に對するが如きをやだ、それで大國醫の時分も婦人は大概室の内に在り幕を垂れて其の間を隔て手丈け出して脉博を見せる位であつたが其れでも効が無ければ御祈禱をやる、此の御祈禱と云ふが中々盛んなもので丁度我が天理教の如きものだ、若し此の時遇然病氣が治らうものな

ら其れこそ御祈禱に對する信仰は非常で醫藥の如き減茶苦茶に排斥する、一體朝鮮の醫者は随分酷い奴が多く草根木皮ならまだしも中には壁土など飲ませて不當の代價を食るものもある、故に醫者は人を殺すものなりと信じて家人が死ぬる迄醫者に見せず御祈禱の一點張りて通すものもあるから斯かる現象も無理からぬことだ、それが近次段々我が醫術に感化されて診斷を受くるやう成つたけれ共婦女子に對しては前述のやうな困難がある、之は我國より女醫師を派出して救済するより外に致方あるまい。

▲藥の分量と其の着色 之は仁川で開業せる某氏の談であるが韓人は一體に藥の分量の多きを好むそうだ、如何に高價の藥でも適當に少量を盛つたのでは「之ばかりの藥が利くものか」と云ふ不満の色がある若し何でも彼でも量目深山に調合してやれば欣然として始

めて満足の風ありと云ふことだ、それから水藥などやるときに天然の無色透明では甚だ物足らぬ風に眺めて居るが其れに一寸紅でも指して色着けてやれば大悦びで自分の藥は赤いからよく利くなどと彼等社會に自慢して見せるそうだ、丸で子供のやうで藥を馬鹿にした話だが此の満足不満足が忽ち精神作用となりて實際施藥の効驗に影響するから仕方がないとは氏が實驗上の話である。

▲施藥と現金主義 或賣藥商店などでは賣擴めの爲め人を内地に派出して廣告主義にトシ／＼施藥をして廻るものもあるが之は韓人に對して寧ろ惡習慣を付けるものだらうと思ふ、何故とならば韓人は天性乞食主義で可成く貰はうと心掛けて居るのだから施米と来れば病人で無いもの迄が病氣と稱し施與に預るが次に真正の賣藥時代に何でも彼でも前例を引き施藥で無ければ藥を買はぬと云ふ



の見たさにノコノコ出掛けて来て山の上や谷の間などに恰かも雪が積んだらん様に白衣の群をなして居る、其處へ建築列車が汽笛を擧げて進行した時には彼等はトツと吶喊の聲を揚げるのである。

▲便乗の希望者 一體韓人は無智昧の癖にハイカラ風を帯びて斬らしいものや珍らしいものを好み、初めて汽船の通つた時などは之に乗つて見て知友家人に白慢話をする風であつたが汽車が出来ても全じ事で大變乗り度がつて居る、現に京釜鐵道なども韓人の乗客が餘程多い相だが彼等は是非乗らねばならぬと云ふ必要はなくとも物好きに乗車を望むのである、されば此の京義線が漸く開通し軍用列車の運轉が開始された時に軍事関係者は日韓人の別なく便乗を許可したれば彼等は種々なる方面より手を廻はして該便乗券を求め寒い冷たい塵埃の多い無蓋車の上に乗つて居る、而して彼等が便乗を

了へて家に歸る時は悠々閑々と坐り込んで一日以上汽車談で持切りである

▲汽車に対する觀念 斯く汽車に便乗し又は汽車見物に出掛けても別段自己の腦漿を絞つて汽車に対する研究をやつて見やうなど云ふ考は毛頭ない、現に彼等は機關車が快走する時や又は汽笛を擧げる時を大變喜んで、其の静止した時行いて機關車の構造を眺め又は其の運轉の理由などを究めるものは一人もない、只面白いものだ……走るものだ……など云ふ兒供のやうな直覺的觀念を持つて居る計りだ、甚だしきは火輪車即ち汽車は戦争の飛道具で敵兵群衆の處へ之で以て乗り込んで散々に撃ち散らすのだ其れで日本兵は強いなど云ふ滑稽な考を眞面目に語るものもある、實際之に類した話は沿路にある牛馬の迷惑で馬が人を載せ牛が荷を附けて道を行く際汽車が



近接すれば驚いて疾驅し人や荷物は必ず田畝の中へ振り飛ばされ中には荷物と共に轉倒する牛馬もある、殊に牛馬は汽笛の聲に恐るゝが故に見付次第面白半分に汽笛を鳴らした機関師もあつた、罪なことだ。

▲夏時軌條の上に眠る。 サチ茲に奈何に韓人が呑氣千萬なるかを立証すべき面白い話がある、面白いよりも寧ろ不思議な程で吾人は驚き呆るゝのみだ、汗は夏期になつて暑くなると韓人は樹の根や林の間や何處へでもゴロ／＼横になる風習があるが奴さん餘程新發明の積りで軌條の上に眠て御座る、京釜、京義共同軌式で日本の軌道よりは巾が廣いのだから横になるには恰度よい、一方の軌條を枕とし一方の軌條に足を揚げ而して枕木の上に體を置けば實際恰度よい寢臺である、お貸けに枕が鐵と來て居るからヒーヤリとして眠心地

がよい、彼等は其の惰眠の天性を發揮して忽ち南柯の夢に入る、尤も斯は多く鐵道事業に従事する人夫の話で普通の韓人が斯く軌道を利用するのは滅多にない。

▲一時の夢より永久の夢。 然るに運轉の都合で貨車を本線より複線に入れ又は機關車が他より進行し來れる際でも該韓人は容易の事では起き上がらない、實際其の急を警告し咎を以てニツ三ツ頭を打つてやつて漸くズツ／＼云ひ乍ら起る位のものである、若し左様の注意を與へてやらの時には彼は其の儘引き殺さるゝのである、僕が兼二浦で實見した奴は頭腦が滅茶々に碎けて腦味噌が不殘流れて居た然る後知己友人は樂まり來りて哀乞々々を泣くのである、世界中之れ程呑氣な國民はなく呆れて物も言へぬ位だが併し考へて見れば一時の夢より其の儘永久の夢に入るのだから又是程氣樂な極樂往生も



併し陰然同會に關係を持ち或は同情を決するものは數限りも無い程である、が同會の規則として會員は斷髮せねばならぬから髮の惜しさに入會を見合はすものも深山ある。何しろ幼少より大切に於て伸ばした髮を一切切斷するの苦痛は彼等に取つて非常のものである、中には自身決心し乍らも其の妻妾の哀訴に依つて髮の切れないものも少なくないそうだ、之等が眞に後ろ髮引かるよといふものだらう

▲會員總數十萬の内約五萬人は平安道の内にあるのだ、即ち平安道は全國の約二分の一の進歩會員を有して居るので此の一事以て其の奈何に盛んなるかを卜するに足る、殊に平安道の首都たる平壤は一層優勢なもので可倉洞と云ふ處に同會事務所を設け其處には西京會長金光洙、同副會長金成一の兩人が指揮監督を司つて居る、共に北韓有数の人物であるそうだ。其れから進歩會の會員は相互に一教團

結して限重なる取締法を設け自活制裁の法を設けて居る、又甲村乙里聯絡して相互提携の實をも擧げて居る、概して首へば同會に限り老人株よりも青年輩の方が自信も強く氣勢もよい様だ。

▲中央即ち漢城に於ける同會の事業として見るべきものは第一政府に對する施政改善の勸告である、近時同會の勢力は實に大したもので朝鮮政府——或は宮中——の威勢を以て奈何に鎮壓しやうと試みても微動だもしない、政府は爲めに種々碎心して進歩會に對する反對黨を造り或は反間苦肉の策を試み奈何にかして之を撲滅せんと焦心るけれ共其の度毎に進歩會の聲譽は益々擧がり會長尹始柄は愈々優勢の地位に立つのみで政府も殆んど持て餘まして居る、是に於てか同會には某大國（日本を指す）が後ろ楯をして居て朝鮮の政治を紊亂するなど種々嫉妬的流言を放つて居るが何も日本が後楯をするので

はなく彼等が自から日本黨などゝ威張つて居るのだ、時勢が左様威張らすのだ、兎に角尹始柄が時々政府大臣に贈る勳告状などは痛快骨を抉ぐる底のものが少くない。

▲地方の事業として見るべきものも少くないが就中我が軍用鐵道に對する彼等の盡力は其の最たるものである。京義線速成工事の急なるや韓人の勞働賃銀沸騰して一日韓貨壹元乃至壹元貳參拾錢となり他の勞働者が一錢も多きを食ふ時に彼等會員は自から進んで勞役に當り賃銀の如きは一日の飯代として唯韓貨六拾錢を受くるのみであつた、若し夫れ以上を與へんとすれば彼等は曰く「日韓同盟して露國を撃つ時に我等が日本を援くるは當に同盟國民の義務なり」と、自信の篤きこと感すべしだ。

▲何事に據らす熱心精勵の結果は其の熱意驚くべきものがある。レ

ールの布設や枕木の配置など實に巧みなもので日本の工夫も及ばぬ位熟達した手合ひもある。殊にレールの如き重量品を數人協力して運轉配置する際の如き恰かも我が砲兵が數人懸つて一臺の砲車を取扱ふが如く、規律的に一致の行動を執り目覺ましき働きを演じて居る、之等は韓人教育の前途大に見込あることを立證するよき參考資料ではあるまいか。

▲其れから彼等進歩會員は其の仲間同志の制裁が嚴重なる爲め殆んど日本人の監督が入らない、他の韓人のやうに閑を見て休んだり又は人の目を偷んで物を掠めるやうの心配は少しもないから唯だ彼等に仕事を命じて任せて置けば「ヤン」と出来て行く、某軍人は彼等會員の効勞顯著なるを賞し宜しく我帝國政府より彼等に勳章を與へたら宜からうと語られた、吾人も至極同感で愁を言へば進んで朝

鮮人の賞罰を悉く帝國の手に有り度いものである。

白蓮に悟り紅蓮に迷ふかな 鷗 且  
石に附す石冷かに草衣かな 同

(23) 朝鮮の霖雨

▲雨期遅し 日本の梅雨は大抵六月十日前後に始まるやうだが朝鮮のは餘程遅れて七月初旬或は中旬に至つて漸く降り始めるのが例である、北方滿洲地方に至れば尙ほ遅れて八月に至り始めて霖雨を見る土地もある、一度降り始むれば連日降り通して田畝を荒し道路を壊ることは日本のも同じである、茲に今三十八年の霖雨に就て観た處を畫いて見やう。

▲秃山と大洪水 朝鮮の山は皆兀々たる秃山だから堪らない、降る雨を少しも貯蓄するの餘裕がなく悉く吐き出して海へ注いで了ふ此點は恰かも朝鮮人の貯蓄心が無いのとよく似て居る、人が自然の感化を受けたのかも知れぬ。兎に角雨を少しも貯へ持つことが出来

ずして降る程流して了ひ其れが又土砂などを持つて行つて川へ注ぎ川は又大きな河へ集まつて遂には驚くべき大洪水となるのである。故に朝鮮には降雨と洪水との間に殆んど時間が無い、降雨即ち洪水で其の代り降り歇めたら忽ち水量が減じて行く。

▲霖雨と大同江 當時僕は丁度平壤に居たのであるが七月三日天振き曇つて覆盆の如き大雨が降り出すや否や平壤市中などは早や水が沼の如く深えて平素其處等に散亂せる朝鮮名物の糞便などが水に混じて漂ふさまイヤ早や呆るゝ計りであつたが斯くて大雨は一日一夜降り續き翌四日の夕方には早や大同江に出水して水量の増すこと約二十五尺江を横切れる鐵道橋は危険なりとの警報が傳はつた、其處で平壤鐵道監部員は總出にて鐵橋に出張し種々手段を盡して橋梁の保全に勉め其の夜は徹夜で働いたが翌朝雨も小歇みとなりて水量

も幾分か減少し先づは吻と一呼吸と云ふ姿であつた。

▲洋々黄海の水 其後雨の多少に依つて水量に増減もあつたが先づ平均二三十尺の増水である、平素既に水量の豊富なるを以て名ある大同江なれば此の出水の觀望は實に壯大にして此岸より彼岸迄は遠距離をなし中に包まれたる洋角島など殆んど埋れん計りである、平素は此邊水清く澄みたれ共洪水の時は勿論泥を含みて水濁り恰かも洋々たる黄海の觀をなして居る、小蒸汽船が全速力で其の上を走る鹽梅などは當に洋中のものでしか思はれぬ。

▲門口へ横付け 大同門外の河岸通りなどは平素人馬の往來する道路が丸で河底となり其の上の石壁迄も浸されて東洋館、櫻屋、松岡旅館など云ふ料理屋旅館の門口迄も水が深えて居る、されば飲出浦より來れる快電丸など云ふ小蒸汽船は殆んど回漕店の軒下へ横着

けで門口より汽船へ道板を掛け解船無くして自由に昇降が出来るのである。

▲**鐵島丸の失敗** 同じく鎮南浦平漢通ひに鐵島丸と云ふ小蒸汽船がある、舊式の外輪船で巾の廣い上に速力が遅く平素他の汽船との競争に毎に敗を執つて居る、其れが此の洪水の際橋梁の下迄通つて来て今や當に懸命の汽力を揮つて橋梁を潜らんとする時不圖した過失で橋柱へ衝突し左なきだに危険なる橋を震駭せしめた、之を見咎めた羊角島の衛兵が直ぐ船を差停めて嚴重の手續を徹し同船は鐵道監部より非常のお口玉を頂戴した、元來鎮南浦平漢通ひの汽船は六艘あるが以來各船とも注意に注意を加へ決して橋梁に觸るゝことはないのに同船丈けは其後又一回衝突し遂に監部より霖雨中航海を差止められた、よくく運の悪い船だ。

▲**破損と浸水** 霖雨の爲めに第一に危険を感じたるは橋梁であるが同時に鐵道線路やら電信電話なども少なからざる損害である、何しろ京義線は速成工事であるから霖雨の爲めに蒙る損害も多く兼二浦平漢間の如き非常に崩壊したそうである、勿論汽車、電信、電話共總て全く不通である、それから兼二浦に於ける大市街地の浸水は又著しい事實で折角設計をした市街豫定地も滅茶々々になつて了つた若し朝鮮全體を計算すれば霖雨の爲めの損害は太したものだらう。

▲**霖雨三十日** 霖雨は約三十日である其の後は秀麗なる秋の天氣となつて朝鮮には滅多に雨を見ぬのである。

。。。。。。。。

晴れや大同江の朝平水 四月  
晴れや鴨綠江を横に飛ぶ 同

## (24) 日本人と氣候

▲朝鮮の氣候　朝鮮の氣候は善く云へば溫和で日本に類似し日本人の生活に適すると云ふけれど悪く云へば随分極端の氣候で寒い時には馬鹿に寒く暑い時には中々熱く其の變化も大陸風で日本人には不適當だと云ふことも出来る、之を至極公平に評すれば南方は殆んど日本同様で確かに吾人の生活に適すれども北緯の一半は決して北海道より良いと云ふことは出来ぬ、併し夫れが日本人の移住と共に氣候が次第に調和され北緯の寒地でさい年一年温かく成つて来るから妙ではないか。

▲變化の的例　人間増殖に據つて或る人為作用を起し其れが自然に影響して氣候の變化を來し寒暖を調和することは既に著しき事實

であつて二三の的例もある、例へば彼の香港は最初英國が占領の時最も氣候の悪しき處とせられ何人も好んで行くものが無かつたが其の後次第に英國が力を用ひて諸工業を起し船舶の出入頻繁となり人口の増殖激烈となるに及んで氣候も何時の間にか良好となり今や實に天與の樂土と化して來たのである、又臺灣は我が占領の當時氣候は酷熱にして悪疫の流行甚だしかりしが近來本邦人の増加と共に次第に寒暖の度を調和して大變住み好く成つたそうだ、其の他北海道の函館、小樽が以前結氷せしに近來其の事無く根室の果て迄も漸く結氷を免れんとする傾向ありと聞くに至つては愈々其事實を證明せられる譯だ。

▲鎮南浦の不結氷　既に朝鮮に於ても以前は仁川が結氷したものであるが日本人増加してより結氷を見ず又今迄結氷港として冬期三







唯箱の中に亂暴な飼ひ方をして居るのである、糞の掃除など一向行届かず恰かも糞の糠を巢に飼ふたやうなものであるが夫れでも雛兒は頗る壯健で病兒などは一疋も無く遂に成育して可なりの齒を造り上げる。之を絲に採るには非常に苦んだやうだが兎も角も女子の手だから何うにか節々の絲にすることが出来た、而して其れを賣るもあるが多くは各自に織りて自分の晴れ着を造るのである。

▲桑は自然生 其れより前五月の始め頃桃李の花散りて春風漸く北韓の野を和らげんとする時僕は病氣保養旁々大同江畔へ出て見れば其處此處韓婦人が腰を屈めて何物か江畔の或る草の根を採して居る模様である、試みに其の去りし跡へ行て見れば野生の小桑が漸く芽を吹き出して居る奴を摘み去つた形跡だから始めて此處に養蠶の行はるゝを覺り不圖好奇心を起して韓人特有の女房出入禁制を許し

て貰ひ右の如く養蠶實見の機會を得ることが出来たのだ、それで桑は前述の通り皆野生であるが大同江畔到る處に多くして爾後調査すれば中には非常の大木もある、根本は直徑約一尺もあつて立派な桑材に取れるものも少くない、若し平壤城南日本軍用地の桑樹を伐れば右の如き良材が數百本も得らるゝであらう。

▲羊角島及桑島 未來の平壤中の島(大阪の夫れに比して)たるべき羊角島は實に奇麗なる砂土の上に全島を周りて高く桑の樹が生へて居る、中間の砂土は多く耕やされて畑となり種々なる蔬菜が植ゑてあるが中には未だ野原の儘放棄されたる部分もある、若し之に桑でも植ゑるならばよく發育するであらう、又大同江の下流萬景俗の向ひに當つて全島皆桑と云ふべき島ありて而もそれが皆高大なる大株のみだ、之を伐倒して新たに良種を植ゑ養蠶を始めるならば當

